

87 章：グラスゴアの聖職者総会

- (1)チャールズ、枢密会議にスコットランド情勢について諮る・・・2
- (2)モントローズ、アバディーンへ行く・・・13
- (3)アバディーン・ドクターズとハントリー・・・19
- (4)ハミルトンに対する指示・・・22
- (5)聖職者会議と議会開催の布告・・・26
- (6)グラスゴアの総会・・・32
- (7)チャールズの外国との関係・・・40
- (8)チャールズ側の準備・・・50
- (9)スコットランド側の準備・・・56
- (10)スコットランド人の声明文と国王の大宣言・・・59

(1)チャールズ、枢密会議にスコットランド情勢について諮る

(1638年7月1日、イングランドの枢密会議、スコットランドの問題について知らされる)

ハミルトンがイングランドに向けて出発する二、三日前の7月1日、チャールズは初めてイングランドの枢密会議に、スコットランドにおける問題について打ち明けた。ベリックとカーライルに防衛体制を敷かなければならなくなったことが、もうこの問題をイングランドが全体としては無関係である問題として扱うことを不可能にさせたのだ。国王は、両王国間に宗教的均一性を実現させたかったのだといった。そして、「国境付近の要塞の強化の仕事をアランデル¹⁾にやらせようと思う。しかし、自分としては、スコットランドの無謀な連中どもがもうこれ以上事を荒立たせないつもりであるならば、自分としても彼らを苛酷に扱おうつもりはない」と説明した。しかし、この曖昧な発言以上には、自分の態度を明らかにしなかった。いかなる意見も枢密会議官たちから求められもしなかったし、また、彼らのほうからも発せられることはなかった。

(国王の気落ち)

チャールズは間違いなく、十分な兵力を集めることの困難さを意識していたに違いない。ファン・ダイクのキャンヴァスに写し取られて多くの賞賛者を彼に獲得したあの疲れた表情が、今、彼の顔に忍び寄っていた²⁾。人生で初めてチャールズはテニ

1) Thomas Howard, 14th Earl of Arundel (1585-1646) 1604年に父の有していたアランデル伯位を継承する。(ref: R. Malcolm Smuts, *Howard, Thomas, fourteenth earl of Arundel*, DNB)

2) ローマ教皇ウルバヌス8世(1568-1644)は、ローマ・カトリック教会とイングランド教会の和解の促進のために、チャールズ1世の胸像を王妃ヘンリエッタ・マリアに贈呈することを考える。そこで、その胸像の制作を彫刻家ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ(1598-1680)に依頼する。ベルニーニは、チャールズ1世の頭を正面から見たところ、横から見たところ、斜めから見たところの三面肖像図を要求する。チャールズ1世は、当時イングランドにいたフランドル出身の画家アンソニー・ファン・ダイク(1599-1641)にその肖像図の制作を依頼する。それは1635年の後半ごろに制作された。できた肖像図はベルニーニのもとに送られ、ベルニーニは、それをもとにして1636年の夏にチャールズ1世の胸像を制作する。ウルバヌス8世は、これをヘンリエッタ・マリアに贈る。それは1637年7月にオートランズ宮殿(サリー州)において国

ス・コートを訪れなくなった。そして、まれな場合を除いては、彼は狩りに打ち興じることも避けた。彼は、「今年は、自分の行幸はごく短いものになるであろう。遅くとも8月の半ば前にオートランズ宮殿³⁾に戻るだろう」と告知した⁴⁾。チャールズは本当にスコットランドに侵入することもなく、議会を召集することもなく、スコットランドを鎮圧できると考えていた節もなくはない。というのは、枢密会議に上記伝達を行ったまさにその日に、法務長官のバンクス⁵⁾から次のような法的意見を受け取っていたからである。そこでは法務長官は、当時のもっとも大きな政治的問題を純粋に法律家の見地から扱っていた。その意見書の中でチャールズは、「王は法律によって、イングランド北部で王より土地または官職を受けている者すべてを、王国の防衛のためにそこに行かせ、自分の出身州の費用負担で武装させる権利を与えられている」と知らされた⁶⁾。また王は、北部の町に命じて、自分たちの費用で防衛施設を建設させることもできた。敵の侵入がかくして不可能になった暁には、イングランド海軍に命じてスコットランド沿岸を封鎖させることができるだろう。こうしてスコットランドは、イングランド軍の介入なしで降伏せざるを得なくなるだろうと⁷⁾。

(7月、スコットランドの問題に関する委員会が置かれる)

王と王妃によって受け取られる。その見事なでき、とてもチャールズ1世に似ているところから、二人を喜ばせ、のみならず、宮廷を、さらには多くの人々を喜ばせたという。ただし、その胸像は1698年のホワイトホール宮殿の火事で、宮殿と共に消失した。また、当該三面肖像図は、ベルニーニによって所蔵され、ベルニーニ亡きあとはその子孫によって所蔵されたが、19世紀に英国の画商によって買い取られ、英国に戻ってきて、現代は、王室コレクションの一つとしてウィンザー城に収蔵されている。

(ref: HP: Royal Collection Trust. Home > Collection > Explore the Collection > Charles I (1600-1649) URL: <https://www.rct.uk/collection/404420/charles-i-1600-1649> ; Wiki, Eng, 'Charles I in Three Positions')

- 3) オートランズ宮殿：ヘンリエッタ・マリアが、チャールズ1世と結婚したときに与えられた財産の一つ。彼女はそこを別荘として使った。自分が収集した美術品の一部をそこに置いた。(ref: Wiki, Eng, 'Oatlands Palace')
- 4) 原注：Garrard to to Wentworth, July 3, *Strafford Letters*, ii. 179. Zonca's despatch, July 6/16, *Ven. Transcripts, R. O.* (HE8, 349)
- 5) Sir John Bankes (1589-1644) イングランド・ウェールズの法務長官 (Attorney-General of England and Wales. 在職：1634-1641) (ref: Christopher W. Brooks, *Bankes, Sir John*, DNB)
- 6) 「そこに」とはベリックヤカーライルなど国境付近の地のことだろうか。スコットランド軍の侵入を防ぐために、そこに防衛体制を敷くことが求められている。
- 7) 原注：The Attorney-General to the King, July 1, *Melbourne MSS.* (HE8, 350)

しかしチャールズでさえも、バンクスにとっては十分と思える方法でイングランド北部が確保できるとは、長くは信じていることができなかつた。まもなく彼は、（まだこの問題について枢密会議全体に相談を持ちかけることには躊躇していたが）同会議のメンバーの中から委員会を立ち上げるように指示し、スコットランドに対する軍事的介入の実現可能性について自分にアドバイスさせようとした。すると、委員会はすぐにどうしようもないほどに意見が割れた。アランデルやコッティングトン⁸⁾、ウィンドバンク⁹⁾などのカトリックや半ばカトリックたちは、すぐにでも戦争を起こすことに賛成した。しかし、ヴェイン¹⁰⁾やコーク¹¹⁾、ノーサンバランド¹²⁾たちは、そのとてつもない困難さに直面して躊躇した。近年、財政状況が改善されてきたにもかかわらず、チャールズの収入は戦争という異常な重荷に耐えるには不十分であった。二、三週間前にジャクソンによってなされた 20 万ポンドの約束は、まだ実現されていなかった¹³⁾。当時国庫には 200 万ポンドしかなかった。借り入れによって集められる金額は最大限見積もっても 11 万ポンドであり、これでは軍隊を維持するのにとても足りないであろう。しかし、それよりももっと重大だったことは、近時の船舶税訴訟に関する判断はイングランド人民の不満を露呈したということである。人民は国王のために剣を抜くというよりも、むしろスコットランド人を支持するのではないかということが率直に認められた¹⁴⁾。

（アイルランドに向けられた関心）

8) Francis Cottington, first Baron Cottington (1579 ? – 1652) (ref: Fiona Pogson, *Cottington, Francis, first Baron Cottington*, DNB)

9) Sir Francis Windebank (bap.1582 – d.1646) (ref: Brian Quintrell, *Windebank, Sir Francis*, DNB)

10) Sir Henry Vane (1589-1655) (ref: R. Malcolm Smuts, *Vane, Sir Henry*, DNB)

11) Sir John Coke (1563-1644) (ref: Michael B. Young, *Coke, Sir John*, DNB)

12) Algernon Percy, 10th earl of Northumberland (1602-1668) (ref: George A. Drake, *Percy, Algernon, tenth earl of Northumberland*, DNB)

13) 本書 86 章 28 頁 (A 4 版), 38 頁 (B 5 版) 参照。ジャクソンは 20 万ポンドだったらすぐに用立てられるといった。

14) 原注 : Northumberland to Wentworth, July 23, *Strafford Letters*, ii. 185. (*HE8*, 350)

こうした絶望的状况の中で、国王の権威を保とうとする人々の施行がセント・ジョージ水道15)を渡ったのも当然のことである。そこには少なくとも、無秩序から秩序を引き出すことが可能であるということを示した男が一人いた。アイルランドを押しえつけた力を、スコットランドにおいて規律を取り戻すことに使えないだろうか。

(1637年8月。アイルランド西部におけるウェントワースの進展)

1637年の夏ほど、ウェントワース16)は自分の大いなる実験の成功に期待を抱いている時はなかった。8月、ちょうどスコットランド人の反抗が深刻なものになりつつあった頃、彼はアイルランド西部に向けて出発した。彼はコンウェイ17)に宛てた手紙の中で、大喜びで、自分の名誉を讃えるために建立された凱旋門や、通過した町の治安判事たちによって自分になされた長い歓迎スピーチのことについて書いている。彼は、自分の巡行のよりシリアスな面についても十分満足していた。彼はリメリックから次のように書いている。

「我々は田舎を通過してここに来ました。その田舎は、もしもイングランドと同じくらいよく耕されていて、家が建てられていて、人が住んでいれば、イングランドで最良のものとそれほど遜色はないでしょう。我々が手がけている仕事はこの上なくうまくいきました。陛下は2つの素晴らしい州、すなわち、オーモンド18)とクレアに対する権利が与えられたのです。そして、その成果に美しさと風味を添えるように人々の可能な限りの満足をもって。私は人生の中でこれほど人々が自ら進ん

15) セント・ジョージ水道：ウェールズとアイルランドの間は、北は北部水道 (North Channel)、真ん中はアイルランド海 (Irish Sea)、南はセント・ジョージ水道 (St George's Channel) となっており、セント・ジョージ水道を抜けるとケルト海 (Celtic Sea) となっている。(Wiki, Eng, 'St George's Channel')

16) Thomas Wentworth, 1st viscount of Wentworth (1593-1641) 国王の腹心。1628年12月に子爵に叙爵される。1629年に枢密会議官。1632年にアイルランド総督。コノート植民を推し進めた。のちの1640年にストラフォード伯。(ref: Ronald G. Asch, *Wentworth, Thomas, first earl of Strafford*, DNB)

17) Edward Conway, 2nd Viscount Conway (bap.1594 – d.1655) (ref: James Knowles, *Conway, Edward, second Viscount Conway and second Viscount Killultagh*, DNB)

18) オーモンド：マンスター地方の東部で、今日のティペレアリー州、および、キルケニー州の一部、ウォーターフォード州の一部を合わせた地域を指したらしい。すなわち、かつてのオーモンド王国が存在した地域である。(ref: Wiki, Eng, 'Kingdom of Ormond')

で自分の地所内にあるすべての財産を手放し、そして静かに落ち着いて、陛下が彼らために陛下のお好きなときにお好きなように切り分けて下さるものを待っているのを見たことはありません。いや、見たと思っても信じられなかったでしょう。私は抗議するのですが、私は、本当は優しい心の持ち主で、彼らの事の進め方にきわめて心を奪われているのです。彼らは常に私に、彼らなりに最大限の尊敬と親しみを込めた表現をしてきてくれました。ですから私は、彼らはほかの誰よりも早く陛下の大臣たる私の愛顧をもてることに満足できるのではないかとほとんど確信し始めています」

と19)。

(オーモンドと克蘭リカード)

このような手紙は、ウェントワースが絶好調にあることを示していた。おそらくこの夏の巡行の日々は、ウェントワースが体験した混じりけのない幸福の最後のものだっただろう。彼は、この思いがけない忠実さの原因が何であるかをほとんど疑問に思わなかった。2年前ゴールウェイ20)で彼は、地元の有力領主克蘭リカード伯21)を無視して事を進めようとした。しかし、リメリックでは、オーモンド伯22)の温かい支援を受けて事を進めたのである。

(ウェントワースのアイランドにおける進展に関する見解)

19) 原注：Wentworth to Conway, Aug. 21, 1637, *S. P. Ireland*, Bundle 286. (*HE8*, 351)

20) ゴールウェイは、アイランド、コノート地方のゴールウェイ州の州都。(ref: Wiki, Eng, 'Galway')

21) アイランドの貴族4代目克蘭リカード伯リチャード・バーク(1572-1635)のこと。その死後は、息子の5代目伯ユーリック・バーク(1604-1658)によって抵抗は続けられた。(ref: DNB, 'Thomas Wentworth, 1st earl of Strafford', 'Confiscations and plantations'; 'Richard Burke, 4th earl of Clanricarde'; 'Ulick Burke, 5th earl of Clanricarde')

22) アイランドの貴族12代目オーモンド伯ジェームス・バトラー(1610-1688)のこと。1633年に祖父の11代目伯ウォルター・バトラーが亡くなり、父のトーマスはすでに亡くなっていたので、跡を継いだ。若きジェームスは積極的にウェントワースに協力してゆき、勢力を伸長した。克蘭リカード父子とは対照的である。(ref: Toby Barnard, *Butler, James, first duke of Ormond*, DNB)

忍耐によって他の領主をオーモンドの例に従わせることができたかどうかに関しては、今は何とも言えない。ウェントワースは忍耐などまったく持ち合わせていなかった。いずれにせよ、改善への衝動は王権に由来したに違いない。ウェントワースが目に向けた改善は、富裕者の活動の増大よりも、むしろ貧者が秩序ある統治から得られる様々な便益の中に見出されることになる。彼はこの頃こう書いている。

「アイルランドの臣民の下層部分が今ほど有力者の圧迫や圧力から守られたことはなく、それは極めて珍しいことです。そのために彼らは神と国王を祝福していると私はあなたに保証します。そして、国王の庇護のもとで得られる便益の大きさ、数の多さに気がつき、享受し始めていると。国王に直接依存することから得られる便益です。彼らがこれまで、けちで居丈高な領主から得ていたわずかな庇護に比べれば雲泥の差です」。

と23)。

(10月18日、ウェントワースのイングランドの出来事に関する見解)

このような成果は、イングランド、スコットランドで起きている情勢についての正しい判断形成には結びつかないだろう。彼は10月に書いている。

「プリン氏のケース24)は、国王と国家の名誉と正義によって選び出され、政府に対して反抗的である、人民が行政官の賢さや高潔性に対してもっていなければならない信頼や尊敬の念に対して侵害的であると判断されたものを賞揚し、誇張する今の時代の趨勢に対して怒りを感じた最初の例ではありません。また、このこともあらためて申し上げるつもりもありますが(中略)自分が行った処罰の権威と見せしめ性を

23) 原注；Wentworth to Coke, Aug. 15, *Strafford Letters*, ii. 88. (HE8, 352)

24) プリン氏のケース：ウィリアム・プリンは、1637年に主教を批判する小冊子が無許可で発刊し、中傷のかどで星室庁裁判所に召喚され、耳削ぎの刑、終身刑などの刑を受けた。(ref: HE8, pp. 228-229, 235) カンタベリー大主教ウィリアム・ロードは、プリンがさらし台で公衆にさらされていたとき、自由にしゃべることができて、しかも公衆から支持されていたことに対して不満であった。これをロードは書簡でウェントワースに伝えている。これを受けて後者が前者に所見を伝えている。(ref: Laud to Wentworth, 1637 Aug. 28 in Laud, *Works*, vi (pt ii), p. 497, 500. また、ウェントワースの所見に対してさらに感想を述べている書簡がこれ。Laud to Wentworth, 1637 Nov. 11 in Laud, *ibid.*, p. 513)

失った君主は、領国の大部分を失ったのも同然です。さらに私が思うには、我々はこの病をまだ完全に乗り越えていません。いや、それどころかまだその悪性の度合いを十分に理解していないのではないかと思うのです。一方、かく装われ、悪用された自由は耐えがたいものです。しかし、それに対してどう対処すればいいのか私にはわかりません。良き人々がその良きことにおいて決然としてくれるまでは。ちょうど、私たちが常日頃観察しているように、悪人がその悪事において決然としているように。その善良さを、神はその恩恵から私たちに注入して下さるのです。というのも、人間はあまりにも弱い存在なので、私はそこからはそれを期待していません」

と25)。

(11月27日)

ウェントワースにとって、ハムデン26)のケースもプリンのケースとほとんど変わらないように見えた。彼はロードに対して不満を述べている。「ハムデン氏は偉大な同胞です。例のグループのまさに異才です。彼は、権力者が彼らのために定めたすべてのことに対して世俗的にも宗教的にも常に反対するように彼らを導きます。しかし、彼らは正しく扱われれば、鞭打たれて正気に戻るのです。そして、彼らのことに関して徹底的に骨を折ってくれる者なら誰に対しても厚く義理を感じるようになるのです」と。

(1638年4月10日)

また、彼はその数ヶ月後に次のように書いている。「私は今でも(中略)ハムデン氏や彼のような者たちが、しこたま鞭打たれて正常な感覚に戻ることを願っています。もしも懲罰棒が痛まないように使われるのならば、私はそれだけますます残念です」と27)。

(7月28日、ウェントワースのアントリム伯に対する見解)

25) 原注：Wentworth to Laud, Oct. 18, *Strafford Letters*, ii. 119. (*HE8*, 353)

26) John Hampden (1595-1643) 政治家。船舶税の支払いを拒否して、裁判にかけられ、敗北した。しかし、国王は彼を国民の英雄にのし上げたという。これがウェントワースには解せない。納得がいかない。(ref: Conrad Russell, *Hampden, John*, DNB)

27) 原注：Idem, Nov. 27. April 10, *Strafford Letters*, ii. 136, 156. (*HE8*, 353)

たとえウェントワースがハムデンに対して思い描いていた処罰形式が正確にどんなものであろうとも、彼がスコットランド盟約派に対して全精力を注ぐ用意のあったことは間違いない。たしかに、ロンドンで提案された計画、すなわち、アントリム伯(28)に兵を集める許可を出し、スコットランド西部を攻撃させるというのは、ウェントワースはまったく気に入らなかった。彼は王に、自分はアントリムの「能力、力、感情」をほとんどまったく評価しないと書いた。「アントリムに武器を託すのは安全ではないでしょう。もしも彼自身がそれを乱用しなくても、スコットランド人植民者はそれを自分たちの目的のために分捕るくらいの十分な強さがあります(29)。アイルランド政庁は、その小さな軍隊からスコットランドに派遣できる兵を一兵もありません。しかし、三、四千人ほどの歩兵だったら新たに召集できるかも知れません。しかし、たとえそれができたとしても、その大部分はイングランド生まれの兵にするべきです。もしもアイルランド人にスコットランドで軍事訓練を施せば、彼らは帰ってきたから危険な存在になるでしょう」と。

(彼のスコットランドの盟約に関する意見)

ウェントワースがこの手紙を書いたとき、彼の手もとにはスコットランドの盟約派がごく最近書いた抗議文の写しがあった(30)。彼らが統治の根本において変化を目指していたことは、彼の目に明らかだった。彼の専属牧師の一人が、最近エディンバラを訪問した。ウェントワースは述べている。「その時その専属牧師に、彼らが彼らの神との盟約と呼んでいると思われるものに対し署名し、誓いを立てることを強いる試みが行われたのです」と。そして、冷ややかにいう。もしもそれがそのようなものであるならば、「それは彼らにすぐに国王に対して従順になるように教えるでしょう」と(31)。

28) 原注：アントリムは父がまだ生きていた頃、ロード・ダンルースとして、故バッキンガム公の未亡人と結婚していた。(HE8, 353)

29) つまり、スコットランド人植民者(プロテスタント)が、故国の動きに同調して盟約派のために動き出すかも知れない。とくにアントリムはカトリックなので、アントリムには従わないかも知れない。アントリムの武器を奪うかも知れない。

30) 本書 86 章 31 頁 (A4 版) (原書 346 頁) の「すぐに抗議文がその返答として読み上げられた」の「抗議文」。1638 年 7 月 4 日に国王の宣言文がエディンバラのマーケット・クロスで読み上げられて、そのすぐあとに盟約派からその返答として「抗議文」が読み上げられた。

31) 原注：Wentworth to the King, July 28, *Strafford Letters*, ii. 187. (HE8, 354)

(7月30日、追求するべき政策を素描する)

これまでのところまだウェントワースに、スコットランド人に対して追求されるべき政策についてアドバイスは求められていなかった。ゆえに彼は、ノーサンバランドに対する私信において自分の胸の内を明かしている。彼は、もしもスコットランド人の侮辱行為が徹底的に是正されなかった場合、その後続く悪い結果をすべて予見することは不可能だという。たしかに、イングランドにおける戦争準備は、即時の宣戦布告を正当化するほどには進んでいないが、でもだからといって、これ以上スコットランド人に譲歩するべきではないと。スコットランド人の「議会を開け」という大胆でぶしつけな要求、しかも、「開かれなければほかの形態の会議に頼るぞ」という脅しと混ざった要求に対して、国王は、「通常は、国王の中でもっとも善良で温和な者にあっては、脅かされて議会を開いたり、臣民によって日時によって行動を制限されたりするものではない」と答えるべきであると。そして、「汝らの現在の行動は、主権者に対するこのような騒々しい行動の一切を非難している宗教に対して信仰告白を行っている者たちから、私が期待する範囲を超えている」と。また、「もしもイングランドやアイルランドのローマ・カトリック信者が同じようなことをしていたとしたら、汝らは何と考えたであろうか」と問うべきであり、その彼らに、「私は汝らが、神によって選ばれし者、すなわち、汝らの国王に対してアプローチする際に必要な慎みと尊敬の念について考慮し、国王の尊厳を損なわずして認められるような請願書や嘆願書を作成するだけの時間を与えてやろう」と伝えるべきであると³²⁾。

(戦争遂行計画を提案する)

ウェントワースによるスコットランド征服プランは、バンクスによって唱えられたものとほぼ同じであったが、それよりもやや実践的であった。最悪の状況に備えるために、ベリックとカーライルに守備隊が置かれなければならなかった。そこでの兵士たちは、北部諸州のトレインド・バンドと同様、冬の間熱心に訓練され、夏の始まりには規律ある軍隊として準備を終えていなければならなかった。財政負担をかけることなくである。もしもスコットランド人が強情であり続けたら、彼らの港を封鎖し、船舶を差し押さえることもできた。こうした状況に陥れば、彼らの新しい統合体はあっという間に瓦解するであろう。国王のシンパがあらゆるところから出て来るだろう。いかなる不要な残虐行為も、征服の仕事を遅らせてはならなかった。扇動的な

32) つまり、権利請願(1628)のときのような解決法にもっていかうとしているのか。

牧師はただ投獄すればよかった。誰も絞首刑にはしななかつた。たとえそれに十分に値するとしても。スコットランドはすぐに国王の足下にひれ伏すであろう、と。

(ウェントワースの究極的目標)

そしてーウェントワースはいつも自分の究極的目標について明確な構想を抱いていたースコットランドの新しい時代がやって来るであろう。スコットランドはアイルランドと同じようにそれ自体の会議体を持ち、それがイングランドの枢密会議と緊密に連携しながら治められていくだろう。宗教的問題もほぼ同じ原則で解決されていくことになる。いかなる即興祈禱³³⁾も共通式次第書³⁴⁾も認められない。いかなる新奇な典礼³⁵⁾も人々に押しつけられてはならない。スコットランド人は、イングランド教会の由緒ある祈禱書を受け入れることに満足しなければならない。そのプロテスタンティズムには議論の余地がないのである。

(人民の安全こそ最高の法だと考える)

もしもウェントワースが、国民の存在をかけた戦いがスコットランドに与えていた力を過小評価していたなら（間違いなくしていたであろう）、イングランド人民の国王に対する献身の度合いをもっとそれ以上に過大評価していた。彼は、イングランド人はまだ彼独自のものであった燃えるような忠誠心に鼓舞されていると想像していた。彼は手紙の最後で次のように書いている。「あなたはこういうでしょう。これだけのことをほんの少しでもやり遂げるための金をどうやって工面するのかと。おそらく、すべての者がその子どもたちからそれを与えるでしょう。今は極限状態のようなときです。私たちがもっているものすべてが危機にさらされているのです。一言でいえば、我々は（神様のおかげで）裕福で有能なのです。そして、今回のケースにおいては、まさに次のようにいえると思われます。すなわち、『人民の安寧が至高の法な

33) 即興祈禱 (extemporary prayers) : 前もって準備されないうで唱えられる祈禱。(ref: <https://www.bbc.co.uk/bitesize/guides/zbp7y9q/revision/8>)

34) 共通式次第書 (Book of Common Prayer) : ジョン・ノックスによって作られたスコットランドの祈禱書。

35) 新奇な典礼 : つまり、最近作られた祈禱書。(ref: 85 章 11 頁)

り』 36)と。国王は、全体の保全のために我々の財産を欠いてはならないのです」と
37)。

これがウェントワースの信仰告白であった。彼は、この大義において国王のために
戦うということは、全体の保全のために戦うことであると固く信じていた。

36) 人民の安寧は至高の法なり (Salus populi suprema lex) : キケロの言葉。(『法律につ
いて』 (*De Legibus*) 3 卷 3 章 8)

37) 原注 : Wentworth to Northumberland, July 30, *Strafford Letters*, ii. 189. (*HE8*, 356)

(2) モントローズ、アバディーンへ行く

(いかなる中道の道も不可能)

おそらくスコットランドにおいては、完全なる征服と権力の絶対的放棄との間のいかなる中道の道も可能ではなかつたであろう。すべてのことがすんだあとに、チャールズの権威が再びスコットランド国民の心の中に根を下ろすことを期待することは望むべくもなかつた。

(若きモントローズ)

ところが、のちにそれは可能であると信じるようになる男が一人いた。その男は国王に味方して、盟約派が支配するスコットランドの岩盤のような強さにぶち当たって粉々に砕け散っていく運命にあった。しかし、その時はまだ燃えるような情熱をもった青年であり、盟約派の大義の中に全身全霊で没入していた。

(1626 年)

モントローズ伯ジェームス・グラハム³⁸⁾は、1612 年に生まれ、1626 年、まだあどけない少年の頃に父の爵位を継いだ。セント・アンドリュース大学に学び、身分の高い家の生まれの者たちが秀でようとする運動科目で容易に一番になった。また、弓術では賞を獲得し、乗馬の際に姿勢が安定していることや、武器の扱い方が巧みであることでも名が知られていた。

(1629 年、1633 年)

17 歳になってから間もなくの頃に結婚し、4 年間幸せな結婚生活を過ごしたのち、長期にわたる大陸旅行に出、そこに楽しみと教えを求めた。

(1636 年)

38) James Graham, 5th earl of Montrose (1612-1650) 1626 年に父、4 代目モントローズ伯の死を受けて、5 代目モントローズ伯となる。のちの 1644 年に初代モントローズ侯に叙せられる。(ref: David Stevenson, *Graham, James, first marquess of Montrose*, DNB)

1636年に戻ってきて、その際イングランドを通過した。そして、ハミルトンに国王へのお目通りを願った。

(ハミルトンに一杯食わされる)

ハミルトンは（伝えられているところが本当ならば）、若きモンローズに嫉妬し、その欺瞞の最たるものの一つをモンローズに食わした。すなわち、モンローズには、「王はスコットランド人のことを耐え切れなく思っている」と伝え、冷たくあしらわれることに対して心の準備をさせておき、一方国王には、「モンローズはスコットランドにおいて危険人物になる男です」といって警戒の念を起こさせた。かくして、モンローズは冷たくあしらわれ、大いに不満の念を募らせて故国に帰郷した。モンローズがもっとも密接な関連をもっていた男、すなわち義兄弟のロード・ネイピア³⁹⁾と、モンローズの親戚筋に当たるエラス伯⁴⁰⁾は、国王に忠実であると

39) ロード・ネイピア：初代マーキストンのロード・ネイピアことアーチボルト・ネイピア (c.1575–1645) のこと。モンローズの姉の夫に当たる。(ref: David Stevenson, *Napier, Archibald, first Lord Napier of Merchistoun*, DNB)

40) モンローズの親戚筋に当たるエラス伯：エラス伯とは、初代エラス伯・7代目メンティース伯ウィリアム・グラハム (1591–1661) のこと。モンローズの遠い親戚に当たる。ウィリアム・グラハムは、1591年に6代目メンティース伯ジョン・グラハムのもとに生まれ、1598年に父の死を受けて7代目メンティース伯になる。1626年にチャールズ1世が即位すると、王に見出され、枢密会議議長にまで昇り詰める。(1628年) 彼は、初代メンティース伯マリーズ・グラハム (1406X13–1490) が王室によって剥奪されたストラサーン伯位を取り戻そうと思って、それをチャールズ1世に懇請し、かなえられる。(1631年) その後、エラス男爵領などの土地を手に入れるが、そうした動きは地主たちに警戒の念を起こさせ、王に、「メンティース伯は、自分こそはスコットランドの正統な王位継承者だなどといっている」と^{ぎんげん}讒言される。初めは取り合わなかった国王だったが、それでもストラサーン伯位は取り消され、代わりにエラス伯位を授与される。(1633年) 以後、エラス・メンティース伯位として認知される。しかし、その後も同様の^{ぎんげん}讒言は続き（その裏にはハミルトン侯ジェームス・ハミルトンが絡んでいたようである。そこからハミルトンに対する敵意が起こったか）、ついに国王も彼に確定的な警戒心をもつようになり、その結果、枢密会議議長などすべての役職を解任され、政治力を失うに至る。(同年) なお、モンローズとはサー・パトリック・グラハム (d.1413?) を共通の祖先とし、その息子で兄のサー・ウィリアム・グラハム (d.1424) の子孫がモンローズ伯家、弟の2代目ストラサーン伯パトリック・グラハム (d.1413) の子孫がメンティース伯家へとつながる。17世紀から遡ること200年

同時にハミルトンに対して敵意を抱いていた。彼らは、ハミルトンはスコットランドの統治をエディンバラからホワイトホールに移そうとしているとして、ハミルトンのことを眉をひそめて見ていた。また、スコットランドにおいてなおも力をもっていた家族間抗争の一つによって、ハミルトンに対して苦い思いを抱いていた41)。

前に共通の祖先から分かれたので、はるか遠くの親戚といえるだろう。(ref: Maurice Lee jun, *Graham, William, first earl of Airth and seventh earl of Menteith*, DNB ; John J. Scally, *Hamilton, James, first duke of Hamilton*, DNB ; C. A. McGladdery, *Graham family*, DNB ; その他 WikiTree (<https://www.wikitree.com/>) も適宜使用)

41) 原注：ハミルトンのモンローズに対するあしらいの話は、ヘイリンに由来するものである。(*Life of Laud*, 350 [訳注 1]) ここでは、その話はもう一人のグラハム氏族の者、メンティース伯に関する話と関連させられている。メンティース伯は、当時のスコットランド王室がその子孫であるところのロバート 3 世の疑問符の付く正統性のために、スコットランド王位に対してある種の継承権を有していた。[訳注 2] チャールズは法的な手続きを通して、メンティース伯より彼の称号を奪った。もっとも、その後王は、メンティースのために新たにエアス伯位を創設しているが。ヘイリンの話の全体は、マッソンの『ホーソンデンのドラモンド』において見出されるだろう。(185 頁) [訳注 3] ヘイリンはいう。ハミルトンは国王に次のように話したと。すなわち、「モンローズは、スコットランド人の間では大変尊敬されており、それははるかさかのぼると王族の子孫に当たるからという理由であり[訳注 4]、彼は親戚筋の王位継承権の主張を支持することに加わるかも知れません」と。しかし、次のことはおぼえておかねばならない。すなわち、ハミルトンは、チャールズに対抗して王位継承権を唱えようとは一切思っていなかったが、それでも彼も継承のラインに位置していたということである。[訳注 5] そして、それゆに、メンティースによるいかなる主張も排斥しておくことに利益を有していたということである。ネイピア氏 [訳注 6] は次の点を指摘している。すなわち、ヘイリンはおそらくロード・ネイピアから彼の情報を得たのだろうと。ハミルトン・ペーパー [訳注 7] の付録に載せられている話にどれくらいの功績を与えてよいかはというのが難しいが、しかし、(そこであったとされている) モンローズとハミルトンのライバル関係はヘイリンの話と非常によく符合しているのである。

(HE8, 357)

訳注：

要するに、ガーディナーはハミルトンのモンローズに対するだましはあったと考えている。

1: Peter Heylyn (1599-1662) (イングランド教会の聖職者、歴史家) *Cyprianus Anglicus : or, the History of Life and Death of the most Reverend and Renowned Prelate William by Divine Providence, Lord Archbishop of Canterbury* (London, 1668) インターネットで閲覧可能。(ref: Anthony Milton, *Heylyn, Peter*, DNB)

2: どういうことかというのと以下の通りである。すなわち、ロバート 3 世の父親はロバート 2 世 (1316-1390, スコットランド王位 1371-1390, スコットランド・スチュ

アート王朝の初代国王)である。その最初の妻は、エリザベス・ミュアである。しかし、彼女との正式な結婚は子どもたちが生まれたあとであった。(1347年)それゆえに、最初は、その子どもたちは非嫡出子であったということになる。婚姻によって準正(非嫡出子が嫡出子の身分を得ること)のようなことも起こらなかったようである。

(*Encyclopædia Britannica*, 'Robert II')

一方、ロバート2世は、エリザベスの死後、ユーフェミア・ドゥ・ロスと結婚する。(1355年)これは初めから正式な結婚であった。よって、そこから生まれた子どもたちは間違いなく嫡出子であったことになる。ロバート2世は、一応エリザベスから生まれてきた子供たちを優先して王位継承順位を決め、それを議会法によって確認させる。(1377年)その結果、エリザベスから生まれてきた息子ジョンがロバート2世の跡を継ぎ、ロバート3世(1337-1406, スコットランド王位1390-1406)として王位に就く。以後、このロバート3世の子孫がスコットランド王位を継いでいく。これがいわゆるスチュアート王室であり、チャールズ1世が属していた系譜である。

しかし、やはりロバート3世の嫡出性の問題は残ったようである。(つまり、スコットランドには「婚姻準正」(婚姻前の男女に子が生まれ、父が認知し、その後婚姻によって嫡出子としての身分を獲得すること)のような考え方はなかったということになるか。)そして、ユーフェミアとロバート2世の子孫こそが正統なスコットランド王位継承者であるという考え方が生まれてくる。これに基づいて考えていくと、ロバート2世とユーフェミア・ドゥ・ロスとの間にはデイヴィッド・スチュアート(初代ストラサーン伯)という息子がおり、その娘がユーフェミア・スチュアートであり、それがパトリック・グラハム(2代目ストラサーン伯)と結婚してできた息子がマリーズ・グラハム(3代目ストラサーン伯、初代メンティース伯)である。その子孫が7代目メンティース伯ウィリアム・グラハムである。よって、7代目メンティース伯こそスコットランド王位の正統な継承者ではないかという見方が出てくる。無論、スチュアート王室のチャールズ1世にとっては、すこぶる不都合な考え方である。

3: David Masson, *Drummond of Hawthornden: the Story of his Life and Writings* (London; Macmillan, 1873) Internet Archive より閲覧可能。

4: モントローズ伯家の先祖はウィリアム・グラハム。(d.1424)その弟がパトリック・グラハム。(d.1413)パトリック・グラハムはユーフェミア・スチュアート(d.c.1434)と結婚する。ユーフェミア・スチュアートの父は初代ストラサーン伯デイヴィッド・スチュアート。(1357-c.1386)その父はスコットランド王ロバート2世(1316-1390, 王位1371-1390)である。だから、モントローズの家は王族とつながっている。

5: ハミルトンもジェームス2世を共通の先祖としてチャールズ1世と血縁がある。(本書86章注40訳注)王位継承権があった。

6: ネイピア氏とは、Mark Napier (1798-1879)のこと。マーキストンのネイピア家の子孫。モントローズに関する著作がある。

7: ハミルトン・ペーパー: ed. by Samuel Rawson Gardiner, *The Hamilton Papers:*

(モンローズの人柄)

1637 年が終わる前は、モンローズは在野の真っ只中にいた。しかし、ひとたびつく側が決まると、いにしえのロマンスのパラディン⁴²⁾のごとく振舞うことは確実にあった。しかし、彼がいかなる大義でも自分の大義とすると、それは政治家の理論整然とした計算によるものではなく、恋する者の愚かな情熱によってなのであった。後年、彼が盟約派から王党派に気持ちを移したときも、それはあたかもロミオが、ロザラインからジュリエットに気持ちを移したがごとくであった⁴³⁾。彼は国王のために戦っているのだから国民盟約のために戦っているのでもなかった。盟約派であるときも王党派であるときも、彼は自分自身の理想のために戦っていたのである。彼は常に目標に向かってまっしぐらに進んでいった。世才にたけた政治家の計略や私心に動かされた策謀家の企みを排すことに躍起になりながら。自然の女神は、彼を流星の輝きのような人生を送るように運命づけたのである。人々を驚かせ惑わせ、そして、彼の希望が潰え去ったあとには、その息吹と名前を残していくように。

(1638 年、モンローズ、盟約派に)

1638 年において、モンローズは愛国的なスコットランド人以外の何ものでもなかった。そして、愛国的なスコットランド人として、彼はあとに何も考えずに政治的闘争の渦の中に身を投じた。彼はのちにアーガイルのことを嫌い、信用しなかったように、ハミルトンのことを嫌い、信用しなかった。彼はハミルトンの「情け深いスコットランド人たち」に対する訴えかけを聞いた者の一人だった⁴⁴⁾。そして、その出来事は彼に深い印象を残した。決断が下されるとき、あるいは抗議文が読まれるとき、

being selections from original letter in the possession of His Grace the Duke of Hamilton and Brandon, relating to the years 1638-1650 (printed for the Camden Society, 1880) Internet Archive より閲覧可能。

42) パラディンとは、もともとはシャルルマーニュの 12 人の勇将のこと。そこから転じて、大義に忠実な勇者などを意味するようになった。

43) シェークスピアの『ロミオとジュリエット』では、ロミオは初めキャピュレットの姪のロザラインに思いを寄せていたが (1 幕 2 場)、ジュリエットに出会うと (1 幕 5 場)、あっという間に後者に気持ちを移してしまった。(2 幕 3 場)

44) 86 章 (A 4 版) 32 頁注 65 参照。ただし、ハミルトンは「情け深いスコットランド人たち」に訴えたのではなくて、「一人の情け深いスコットランド人」として彼らに話しかけている。

彼が先頭にいることは確実であった45)。盟約派のリーダーたちは、この熱烈なエネルギーのうまい利用の仕方を知っていた。ハミルトンがエディンバラから去ると、すぐに彼らはモンローズをアバディーンに差し向けた。

45) 原注：おそらくゴードンの話 (i. 33) は本当であろう。もっとも、実際にあったことよりも粉飾されているように見えるが。そして、間違いなく 1650 年よりもあとに書かれたものである。「伝えられているところによると、エディンバラのマーケット・クロスで行われた抗議の一つで、モンローズが“scaffold”（足場。処刑台という意味にもなる）の上に置かれた大樽の上に立っていると、ロシス伯が冗談交じりに彼にこういったという。『おい、ジェームスよ。君はその上から 3^{ひろ}尋のロープ [約 5.4m のロープ] で吊られてみんなを見下ろすようになるまでは決して心休まらないな』と。(中略) これはのちに本当に同じ場所で実現することになる。その時、その足場の支柱として使われていたものが、モンローズの処刑の時にも使われたという者もいる」と。(HE8, 358)

訳注：「ゴードン」とは、James Gordon, *History of Scots Affairs, from 1637 to 1641* (1841)のこと。(⇒ガーディナー文献早見表)

(3)アバディーン・ドクターズとハントリー

(アバディーン・ドクターズ)

大規模な国民蜂起は、団体の特権や個人の自由をほとんど考慮しない。蜂起には加わらずにそれを嘲笑的に見ている者や、あるいは当惑して見ている者まで潜在的な裏切り者と見なされる。(実際の裏切り者とは見なされないまでも。打って出る機会を虎視眈々と待ち望んでいるような。) 盟約に署名することを拒絶した牧師は、黙らされ、虐待され、自分たちの故郷を追われた。彼らはスコットランドでただ一つの場所に集まり、そこで自分を保つことができた。アバディーン・ドクターズは、べつにチャールズの悪く運命づけられた祈禱書を熱烈に支持しているわけではなかった。また、ロードやその神々しい美にも何の魅力も感じていなかった。彼らは、パトリック・フォーブスによって設立された学校の忠実な弟子であった⁴⁶⁾。彼らが予見した危険は、あらゆる民衆的興奮、とりわけ民衆の宗教的興奮と分けても分けられないものであった。彼らは自分たちの静かな学究生活が侵されるのではないかと恐れたのである。与えられたデータから誰にも邪魔されずに結論を引き出す権利を侵されるのではないかと思ったのである。彼らは王党派であったが、ロードやレン⁴⁷⁾のようなそれではなく、チリングワースやヘイルズ⁴⁸⁾流のそれであった。権威の名のもとで知的自由という高尚な理念を彼らは保ったのである。チャールズのもとで、彼らは彼らが必要としているような自由を手に入れられた。国民盟約のもとでは、彼らは少しも自由を手に入れられないであろう。

(7月、アバディーンからの危険)

46) パトリック・フォーブスは、学校は設立していないようだが、アバディーン主教に就任すると(1618年)、アバディーン大学の学長に就任したようで(当時のアバディーン主教はアバディーン大学の学長を兼ねていた?)、その際とくにキングス・カレッジの改革に力を尽くしたようである。「アバディーン・ドクターズ」といわれる面子は、ほとんどがキングス・カレッジに何らかの形で所属している。(ref: DNB 'Patrick Forbes'; Wiki, Eng, 'Aberdeen Doctors')

47) Matthew Wren (1585-1667) イーリー主教。(在職: 1638-1646, 1660-1667) (ref: Nicholas W. S. Cranfield, *Wren, Matthew*, DNB)

48) John Hales (1584-1656) イングランドの聖職者、神学者。(ref: Basil Greenslade, *Hales, John*, DNB)

アバディーンでは状況はそう見えても、エディンバラではそう見られるということはありませんでした。アバディーン・ドクターズの自由は容易にスコットランドの隷従になりえた。もしもアバディーンが国王軍に占領されてしまえば、それは盟約派スコットランドにとっては、のちにヴァンデ地方が共和政フランスにとってなったものになるだろう⁴⁹⁾。その危険性は、アバディーンが大学の論理によってもたらされる力以外の力を背後にもっていただけにますます大きかった。

(ハントリーとアーガイル)

アバディーンは強力なゴードン族によって占められている領域のすぐそばにあった。ゴードン族の族長はハントリー伯であった。スコットランド北東部におけるハントリーは、南西部におけるアーガイルと同様、単なる有力貴族以上の存在であった。二人とも自分の領域内では国王のような存在であった。二人とも山岳地帯を超えたところにまでその権威を及ぼしていた。二人ともスコットランド貴族であるばかりでなく、ケルト族の族長でもあった。このライバルたちの権威は、アーガイルの城のあるインヴァレーリーからはるか遠く離れたところで、そして、ハントリーの城のあるストラスボギーのボグからはるか遠く離れたところで、互いに接し合っていた。

(ハントリーの尊王主義)

これら二人のうち、ハントリーの権力はアーガイルの権力ほどにはケルト的なものではなかった。ゆえに、それは南部の住民からの攻撃によりさらされた。軍隊が侵入してくると、その軍隊は、モリー湾⁵⁰⁾沿いの細長く続く低地地帯をずっと突き進むことによって、容易に山岳地帯を避けることができるだろう。ハントリー家は、このより文明化された地帯を、丘陵地帯に住む住民からの無法な攻撃から守ることによって力をもつに至った。そのより文明化された地帯は、南部の影響からは隔絶された地帯であり、ハントリーのすぐ前の先祖たちは古代教会の信仰を保ってきた。ゆえに彼

49) ヴァンデとはフランスの一地方のヴァンデ地方。フランス西部に位置する。フランス革命時代、そこで当時の共和政フランスに対する反乱が起こった。よって、国王軍に占領されたアバディーンが盟約派スコットランドにとって、ヴァンデ地方が共和政フランスにとってなったものになるとは、反乱の町、獅子身中の虫になるということ。

(ref: Wiki, Jpn, 'ヴァンデの反乱')

50) モリー湾 (Moray Firth) : モリー湾は、スコットランド北部のインヴァネスの北東に広がる、ほぼ三角形のスコットランド最大の湾である。(ref: Wiki, Eng, 'Moray Firth')

らは、エディンバラに座したいかなる政府に対しても羨望の眼差しを向けきた。国王がスコットランド南部における一般的心情から遠ざかるにつれて、彼は北部における臣民の自然な同盟者として見なされるようになるだろう。ハントリー自身の地位は、彼を地域的独立のための戦いの長にするような地位であった。国民的グループの勝利は、彼の権力を通常の貴族のそれにまで低下させるだろう。ハントリーは、祖国の同胞に足並みをそろえるようにと彼を促すために送られてきた使者に対して、次のように答えた。「私の家は、代々スコットランド王の側に立つことによって高められ、存在してきた。私としては、もしも現国王が破滅すれば、私の生命、名誉、財産の一切を国王の瓦礫のもとに埋もれさせる決意だ」と51)。

(7月20日、モントローズ、アバディーンに)

7月20日、モントローズはアバディーンに入った。当地の習慣に従って、一杯のワインが大切な客人として彼に進呈された。しかし、彼は盟約に署名を受けるまではそれを飲むことを拒んだ。モントローズは3人の説教師を伴っていた。ヘンダーソン、ディクソン、キャントであった。しかし、どの教会もこの3人に門戸を閉ざした。そこで彼らは、通りで説教を行った。しかし、やはり徒労に終わった。アバディーンの人々は盟約に署名しようとはしなかった。近郊では、フォーブス族のようなハントリーの権力に嫉妬を感じている者たちの間で署名が行われた。彼らが署名したことと軍隊によるプレッシャーによって、若干名の署名が得られた。

(7月29日)

二人の牧師が、自分たちは依然として国王に忠実であり従順であるとの抗議文をつけて自分の名前を書いた。彼らの留保は、モントローズだけではなくヘンダーソンやディクソンによっても認められた52)。

51) 原注：Gordon, i. 49. (HE8, 360)

52) 原注：General Demands concerning the Covenant. Aberdeen, 1662, Spalding, i. 93. (HE8, 360)

訳注：

①前者の資料：John Forbes, *Generall demands concerning the late covenant propounded by the ministers and professors of divinity in Aberdene* (Aberdeen, 1662) Internet Archive で閲覧可能。ジョン・フォーブス(1593-1648)は、パトリック・フォーブスの息子。聖職者、神学者。アバディーン大学教授。国民盟約に反対。

②後者の資料：John Spalding, *Memorials of the Trubles in Scotland and in England*

(4)ハミルトンに対する指示

(7月27日、ハミルトンに対する指示)

このような留保は、さまざまな人によってさまざまに解釈されれば、おそらく全スコットランドの受け入れるところとなっていたであろう。しかし、そのような単純な自分の威厳を保つ方法は、チャールズの承認するところとはならないだろう。ハミルトンと相談したあと、王は、聖職者集会と議会の開催を許可するところまでは譲歩した。ハミルトンは、聖職者会議内における主教の影響力をできる限り確保するべく全力を尽くすことになった。また、彼は主教の地位を廃止するいかなる動議に対しても抗議することとなった。しかし、主教が自分の行為に関して将来の聖職者会議に対して責任をもつようにするいかなる計画に対しても同意してよいとされた。そして、以上に対して異議を唱えられた場合は、ハミルトンは、「交渉を打ち切るよりも、たとえ不合理なものであってもいかなることでも譲歩してよい」ことになった。

(1567年の信仰告白)

おそらくこの妥協案に対してスコットランドの同意を得ることは難しいであろうが、それはチャールズの思いつきによる不必要な障害によっていっそう難しくさせられた。すなわち、国民盟約は黙認されてもならないし、また言い逃れもさせてはならない。それは、1567年にスコットランド議会によって採択され、そのトーンにおいて非常にプロテスタント的ではあるが⁵³⁾、その後の一切の討論を当然のごとく完全にクリアした一つの信仰告白を蘇らせることによって対抗されなければならない。そして、その信仰告白に対してチャールズは、その信仰告白を受け入れた者が「陛下の主権的権力のもとにあるこの国の法と自由だけではなく、陛下の聖なる身体と権威を」擁護すべき義務を負わせる条項を付け加えた。この文書は、スコットランドで署名を求めて回覧されることになる。国民盟約に付け加える形ではなく、それに代わるものとしてである。国民盟約への署名を拒絶したために追放された牧師は、すべても

A. D. 1624–A. D. 1645 (2 vols) (Aberdeen printed for the Spalding Club, 1850-1851)
Internet Archive で閲覧可能。ジョン・スポルディング (b.1624?, d. in of after 1669)
は歴史家。

53) つまり、チャールズから見ると非常にプロテスタントすぎるきらいはあるが。

との教区に復活させられる。主教が介在することなく教区に迎えられた牧師は、すべて追放される54)。

(8月10日、ハミルトンの2回目のミッション)

こうした指示を受けて、ハミルトンは再びスコットランドに旅立った。8月10日、エディンバラに到着した。すると、彼はすぐに論争に巻き込まれた。それは聖職者会議の構成についてであった。そのことについて彼は告知しに来たのだが。チャールズの提案は、排他的に聖職者による会議であって、そこでは、できれば主教が議長になるべきであった。盟約派のリーダーたちは、そのお膳立てには耳を貸そうとしなかった。彼らは、かつてスポティスウッドがパースの聖職者会議で聖職禄の喪失をもって牧師たちを脅かしたことをほとんど忘れそうにもなかった。彼らはロンドンで起きていることを熟知していたので、チャールズのいうことを信用しなかった。たとえスコットランド人召使いが、王が就寝したのちに彼のポケットを漁って、彼の秘密の通信の中味を知ろうとしたという話が本当のことであったとしてもなかったとしても55)、間違いなかったことは、彼の企てていることはイングランドで知られている以上にスコットランドで知られていたということである。

(ハミルトンの盟約派分断工作56))

ハミルトンは何とかして国王の敵たちを分裂させようと試みたが、それは彼らを一層まとまらせたただけであった。ハミルトンが貴族たちに、「おまえたちは単におまえたちの父祖が耐えきれなかった長老制の^{くびき}軛を今再び自分たちの首にはめようとしているだけだぞ」というと、「主教制が唯一の、そうした危険性から逃れるための手段ではない」といわれた。長老制では、平信徒が体制の一部を成していた。そして、平信徒ということで、貴族やジェントルマンたちは容易に教会法廷に足を踏み入れられるだろう。そこで彼らは、難なく聖職者支配に対する試みを牽制できるだろう。それはたしかに聖職者たちにとっては、あまり喜ばしい事態ではなかった。また、彼らは

54) 原注：Burnet, 65. (HE8, 351)

55) 原注：ヘンリエッタ・マリアが1642年にイングランドをあとにしたあと、夫に、ポケット（そこには当時、王が妻との間で使っていた暗号の解読表が入っていた）に注意しなさいと忠告したことは、この話の信憑性を増させる。(HE8, 351)

56) つまり、貴族と聖職者の分裂を図った。(cf. 「ジェントリーと聖職者間に嫉妬を起こさせようというハミルトンの画策は無駄に終わった」本章28頁)

貴族たちの影響力が強まることに若干の警戒心を抱いていた。なぜならば、貴族たちは自分たちの権益がひとたび満たされるや否や、教会の目的の追求に甘くなることが予想されたからである。すると貴族たちは、聖職者たちに、「我々の支持が欲しいなら、我々の言う通りにしなければだめだ」と率直にいった。チャールズがさんざん迷った挙句の果てにした約束をちゃんと守ることに賭けることはそれほど心そそることではなく、聖職者たちに、これまで常に怯むことなく自分たちの側に立ってくれた自分たちの庇護者からの支持を放棄させる気にはさせなかった。

(8月13日、ハミルトンと枢密会議)

8月13日、ハミルトンはスコットランドの枢密会議にスコットランド和平案を提示した。それによると、聖職者と平信徒による臨時の集会はすべて解散させられることになっていた。また、主教および追放された牧師は、合法的な司牧を行う限りにおいて保護されることになっていた。そして、聖職者会議のためのすべての選挙において、平信徒は投票権をもたないこととなっていた。また枢密会議は、「国民盟約に関して満足を与えるか⁵⁷⁾、もしくはそれを放棄するようにアドバイス」することになっていた。

(8月25日、ハミルトン、イングランドに戻る)

これらの提案の受け止めは非常に芳しくなかったので、ハミルトンは再び指示を受けるためにイングランドに戻った。盟約派から、9月21日までは自分たちで勝手に選挙をやらないように約束を取りつけて。9月21日までにはスコットランドに戻ってくるつもりであった⁵⁸⁾。

(9月17日、ハミルトンの3回目のミッション)

9月17日、ハミルトンが三度目にエディンバラに現れたとき、彼は、チャールズにとっては無限の譲歩と思えたに違いないものをもって来ていた。すなわち、ハミルトンが聖職者会議と議会の開催のための召集状を発付すること、および、前者のための

57) 「国民盟約に満足を与える」とは、つまり要求に従って自分たちの国民盟約を修正するということか。

58) 原注：*Baillie*, i. 98. *Spalding*, i. 98. *Burnet*, 69. *Large Declaration* 111. (*HE8*, 362)

選挙に関する限り、前国王時代に守られていた形式にできる限り近づくことで満足することとされていた。また、「国王は共通祈禱書、教会法典、高等宗務裁判所を絶対的に無効にし、パース五箇条の実践をも停止し、もしも議会が望むのなら、その完全な廃止に同意する用意がある」と宣言することとなっていた。さらに主教制は制限され、将来の主教は、その行為に関して聖職者会議に責任をもつこととするとされていた。

(国王の盟約)

しかし、チャールズはそこにとどまらなかった。たしかに彼は、もはや国民盟約の放棄を直接求めているわけではなかった。また、1567年の信仰告白に署名を求めて回覧するという考えも捨てていた。しかし、独自の書面に署名を求めて回覧することによって、威厳を保つことが必要だと考えていたようである。今回は、その書面は1580年に起草された信仰告白から成り立っていた。(それが国民盟約の基礎となっていた。) もちろん、ジョンストンが付け加えたものは省かれることとなった⁵⁹⁾。そして、それは1590年に起草されたある盟約に置き換えられることとなった。その署名者は、ローマ・カトリックを取り締まり、真の宗教を推進し、国中至る所に国王の威光とそれへの服従を確立させるにおいて、国王の側に立つように拘束されていた⁶⁰⁾。

59) ref: 「ジョンストンとヘンダーソンは、この盟約に、実情にあった追加条項を加えることを任された」(86章 8頁 (A), 10頁 (B))

60) 原注: *Burnet*, 75. (*HE8*, 363)

(5)聖職者会議と議会開催の布告

(9月22日、聖職者会議と議会開催の布告)

9月22日、枢密会議官たちは少しためらったのち、国王の盟約に署名した。同日、布告がマーケット・クロスでなされた。それは、国王が意図した譲歩を告知するところから始まり、そのあと人々に新しい盟約に署名するように呼びかけていた。それは彼らの信仰をあらためて証拠立てるためではなく、国王が臣民に、すでに確立され信仰が告白されている宗教に対していかなる変化も変更も認めるつもりはないことを保証するためであった。最後に、聖職者会議が11月21日にグラスゴーで開かれるように、また、議会が5月15日に開かれるように召集命令が出された⁶¹⁾。

(再び抗議)

ホーソンデンのドラモンド⁶²⁾のように貴族の同盟と聖職者の横暴を懸念をもって見守ってきたごく少数のスコットランド人らによって、その布告は平和のメッセージとして歓迎された⁶³⁾。しかし、ドラモンドがその出身であるスコットランドの大部分の人によって、その布告は深い不信の念をもって迎えられた。布告文の読み上げが終わると、そのあとにまたしても抗議が持ち上がった。それは、これまでのどの抗議よりも辛辣で挑戦的なものとなった。スコットランドはすでに主教とはいかなる関係ももたないことに決めていた。たとえその権力が制限を受けていようといなかろうと。よって、明白な理由もなく新しい盟約が導入されることは、それ自体疑惑の念を呼び起こすことが必定であった。

(なぜ再び盟約に署名しなければならないのか)

すぐに質問が持ち上がった。いかなる目的のために自分らは署名を求められるのか。国王によってなされた説明は、理解できないものだった。抗議者たちはいう。(その言葉は十中八九ヘンダーソンのものだった⁶⁴⁾。) 「もしも我々がこの盟約に

61) 原注 : Peterkin's *Records*, 81. (HE8, 363)

62) William Drummond of Hawthornden (1585-1649) スコットランドの詩人、パンフレット作家。(ref: Michael R. G. Spiller, *Drummond, William, of Hawthornden*, DNB)

63) 原注 : Drummond's *Irene*. Works, 163. (HE8, 363)

64) 原注 : それはマッソン教授の示唆である。 *Life of Milton*, ii. 33. (HE8, 364)

新たに署名しなければならないとしたら、それは神を嘲り、その名を穢す行為だと考えるであろう。なぜならば、国民盟約を結ぶときに流された涙はまだ乾いておらず、拭い去られてもいない。鳴り始めた楽しい音楽はまだ止まっていない。我々からは、いかなる新しい必要性もあり得ない。それは我々の方から見れば、作られた必要性である。なぜならば、この新しい盟約に署名を求めることは、たとえそれが第一にはローマ・カトリックに対する備えであっても、その我々はローマ・カトリックを真に嫌っていることは周知の事実であるし、そのためにこの一年間、ふんだんにこれを証言し続けてきたからである。我々は神の側の奇蹟を複数にするつもりはないので、我々の側でも誓いや盟約を複数にするべきではない。だから、必要もないのに、まるで子供が玩具をいじくるように誓約をいじくるべきでない」と65)。

(聖職者会議が最高権力者ではないのか)

国王の盟約に関する論争の裏にもう一つ別の論争が現れた。そのほうが深刻な問題であった。チャールズは主教の権力を制限することによって十分なことをしたと思っていた。しかし彼は、そのようなことをすること自体、彼の権限を超えているといわれた。聖職者会議がそれを適切に裁くであろう。教会に関するすべての問題を判断するように神から授権されているのは、国王ではなくて聖職者会議であると。

(抗議は宣戦布告だった)

これがスコットランドの盟約派によって出された宣戦布告であった。宣戦布告以下の何ものでもなかった。聖書と長老派のロジックにえんえんと訴えるその根底には、国民的独立の意識があった。主教制はあくまでも異物であった。それは決して力と欺瞞によって導入された生体によっては吸収されなかったのである。

(国王の盟約に署名する者はわずか)

国王の盟約に署名を集めようとする試みは、ほとんど完全な失敗に終わった。国王に忠実なアバディーンとその近隣は1万2000の署名を獲得したが、スコットランドのそのほかの地域から集められた署名はわずか1万6000であった。「国民盟約は天に由来するもので、国王の盟約はサタンの作品であると宣言するように靈感を吹き込

65) 原注：Peterkin's *Records*, 86. (*HE8*, 364)

まれた」と触れ回っていたマーガレット・マイケルソンという名の狂女は、広く預言者と見なされた66)。

(選挙の仕組み)

人民感情がこのように表れている状態で、聖職者会議のメンバーの選挙における投票がどのようなシステムのもとで記録されるかはほとんど問題にならなかった。しかし、盟約派は、「1597年に開催された聖職者会議で可決された法が統治構造上のルールとして認められるべきであり、それ以降に制定されたすべての法は無効とされるべきである」ということを当然のこととして扱った。ジェントリーと聖職者間に嫉妬を起こさせようというハミルトンの画策は無駄に終わった。各長老会の選挙民は、各教区の牧師と1人の平信徒長老から成る。この選挙民によって、3人の牧師がその長老会を代表する者として選ばれた。他方、同じ地区のジェントリーは、自分たちを代表する者として1人の平信徒長老を選出する。エディンバラは別個に2人のメンバーによって代表される。その他の勅許自治都市(バラ)は、1人のメンバーによってそれぞれ代表される。

(こうして選ばれた聖職者会議の強み)

なぜこのような特殊な選挙システムで生まれた組織がそうでない他の方法によって生まれた組織よりも神の権威でもってしゃべると見なされるのか、どんなに頭の鋭い論理学者でもその問いかけに対する満足のゆく回答を示すことは難しかったであろう。しかし、次の点は疑いがなかった。すなわち、それは単なる聖職者集会では語れなかったような国民の権威でもって語る事ができたという点である。スコットランドのすべて、すなわち、その強さと弱さ、その苛烈で妥協のない教条主義、そのいかめしい宗教的情熱、その世俗的な野心とやたらと細かいところに目をつけて議論を吹っかけてくるところ、その素朴なやり方、外国の宗教や礼拝に対してははっきりとした抵抗を示すところが、まるで鏡に映るように、国王の特別代理人をものともせず選ばれた聖職者会議のうちに反映されていたのである。

(チャールズ、挑戦を受けることにする)

66) 原注: *Burnet*, 81. *Gordon*, i. 131. (*HE8*, 365)

チャールズが、向けられた挑戦を受け流すことはほとんどできなかった。国王が会議の構成や、そこでなされるかも知れない決定に全然参画することができないことを容認することは、スコットランドにおいて国王の権威は取るに足らないものだということを認めることになるだろう。そして彼は、スコットランドで譲歩すれば、すぐにイングランドでも譲歩することを求められるだろうということを本能的にわかっていた。今、唯一の問題は、いかなる理由に基づいてその挑戦を受けるべきかであった。スコットランドの主教たちは、自分たちの目の前にあるものがわかっていたので、聖職者会議そのものの開催を禁ずるべきだとアドバイスした。しかしハミルトンは、もしもそういうことがなされれば、スコットランドの盟約派は、「国王は一度たりとも聖職者会議が開催されることを本気で望んだことはなかった」と主張するだろうと述べた。そして、チャールズもハミルトンと同意見であった。

(10月22日、ハミルトンのアドバイス)

ハミルトンの計画は、聖職者会議は議事日程に入ることを許されるべきだということもその一つだった。そこで彼がまず行う仕事は、直近の布告の中ですでにその予兆が示されている「修正された主教制」に関する計画を会議に提出することである。もしもこれが拒絶されれば（おそらく確実にそうなるであろう）、そして、もしも主教が被告人として召喚されれば、ハミルトンは会議を解散し、これに協力した者を国王の反逆者として宣言するのである⁶⁷⁾。主教たちは、当該聖職者会議が違法に設置されたもので、いかなるケースであっても主教に対して判決を下す資格のないものとして非難し、すぐに裁判権辞退書⁶⁸⁾を提出することになるだろう。

(国王の意図)

ついにチャールズがとった立場がはっきりと示された。今や何の成果も出ない交渉を長々と引き延ばすことによって時間稼ぎをしようとは毛頭思っていなかった。もしもこの時盟約派が、限定付き主教制というチャールズの提案を受け入れていて、主権に関わる問題について、これには触れずじまいにしておけば、チャールズもおそらくは、自らが示した譲歩案（それは彼にとって心地よいものではなかったが）が実行に移されるのを眺めているだけで満足していたであろう。しかし彼は、その主権に関わる問題がまさに問題になっているのだということをよくわかっていた。そして、おそ

67) 原注：Hamilton to the King, Oct. 22, *Hamilton Papers*, 46. (HE8, 366)

68) ref: 原書 p. 326 ; 本書 86 章 3-4 頁(A)

らく彼は、自分がなした譲歩の大きさに関しては、それは絶対に相手方によって拒絶されると信じていたので、その分心配はしていなかっただろう。ハミルトンは、この頃国王に次のように書いている。「陛下のご命令は私が思いますに、ここスコットランドに陛下にお味方する一党を作り上げ、ひとたびそうなれば、この狂った者どもを静めることになり、そうなればその後は、陛下は国王として統治を行い、陛下の神聖なる領域に限りなく足を突っ込んだ者たちにしかるべき罰を与えることができるでしょう」と69)。

(スコットランド側の抵抗は必至)

スコットランドのリーダーたちには、国王が本音では何を考えているかを知っていれば（おそらく知っていたであろう）、この決裂を修復不可能なものにするだけの十分な理由があった。彼らは、自分たちについてくる者たちと大きな問題を抱えることはあまりなさそうであった。大きな集団は、ひとたび動き出すと、それ自体の弾みを得るものであり、イングランドから来る知らせのすべてが、彼らに、「国王は自分の条件が受け入れられようとなかろうと、スコットランドに対する攻撃を考えている」という確信を確認させた。

(戦争の徴候)

この頃すでに、ハミルトンがマーからエディンバラ城の指揮権を購入して、城が包囲されたときに守備隊にとって不可欠な軍需物資が城に搬入されなかったのは、ひとえに城を厳格に見張っていた市民のおかげであることが知られていた。また、信頼の厚い将校がダンバートン城の管理に派遣されたことや、ベリックやカーライルを保持するための、あるいは、ハルに軍需物資の倉庫を作るための準備が行われたことも知られていた。また、ある捏造されたスピーチが広く出回っており、それはレノックス公がイングランドの枢密会議で、自分の祖国の防衛において行ったとされているスピーチで、そこから、イングランドの枢密会議はスコットランドに対して敵対的なプランを抱いていると推論されていた。

(10月24日、主教たちが聖職者会議の前に召喚される)

69) 原注：Hamilton to the King, Oct. 15, *Hamilton Papers*, 42. (HE8, 367)

この動乱の中でこれまでよくあったように、盟約派のほうで積極的手段に打って出た。10月24日、彼らは法的に正式な形でエディンバラの長老会の前に現れた。そして、見せかけの主教をその権限を踏み越えたかどで、さらに不正直かつ放蕩行為のかどでも告発した。そして同会に、これらの事案を聖職者会議に付託するように要求した。予想されたように、この要求はすぐに受け入れられ、告発文がエディンバラのすべての教会において、公の前で読まれるように命じられた(70)。

(11月17日、国王、戦争の準備を行っていることを知らせる)

かくして取られた手段は、チャールズに脅しという手段に頼らせた。彼はハミルトンに書いている。「君は公衆に知らせたまえ。そして、宣言したまえ。彼らのことの運び方のせいで私は、今後起こりうるいかなる不届き行為に対しても対抗できるように武装することを考えなければならなくなったので、そして、彼らにこう保証せよ、私はあくまでも平和を求めているので、こうした準備が徒労に終わることを願っているが、彼らのほうから不届き行為がなされた場合は別だと」と。また、主教に対して脅おどされた手続きに関しては、「当事者が判事も兼ねるなんて聞いたことがない」といった。そして、会議の構成の合法性がまさに問題なのであり、それは聖職者会議自体で決められるものではないと。王はなおも自分が約束のすべてを果たす用意があり、当該聖職者会議の過ちと無効事項のすべてを修正するための新たな聖職者会議を召集する用意があると(71)。

70) 当時は、大主教、主教も、聖職者会議に服するという形で(1572年のリース協約による)、改革派教会の役職として存在していた。(浜林, 131頁)

71) 原注: The King to Hamilton, Nov. 17, *Burnet*, 99. (*HE8*, 368)

(6)グラスゴアの総会

(11月21日、会議の開催)

チャールズこそ判事というよりは当事者ではないのかと聖職者会議は問いたいところであつたらう。しかし、彼らは逆襲するよりも行動するほうを選んだ。11月21日、聖職者会議はグラスゴアの大聖堂で一堂に会した。同大聖堂はスコットランドの大聖堂で唯一、町の人々から愛され尊敬されていたために破壊と朽ち果てから免れ、長老主義の新しい誕生を見るまで生き残った大聖堂であつた。ハミルトンがリーダーシップを握ろうとしたにもかかわらず、同会議は自らで主導権を握り続けた。ハミルトンがこの時のためにと準備していたスピーチは、行われずじまいだった⁷²⁾。選挙の問題が直ちに提起されるべきだという彼の要求は、即座に却下された。主教たちの裁判権辞退書を読まれるべきだという彼の提案は、白い目で受け止められた。聖職者会議は議長 (Moderator) の選任手続きに入ることによって、自らが存在する権利を主張した⁷³⁾。議長にはアレグザンダー・ヘンダーソンが選ばれ、書記 (Clerk) にはジョンストン・オブ・ウォリストンが選ばれた。

(11月22日、ハミルトンの報告)

質疑はかくしてハミルトンに不利なように決められ、今や彼の唯一の目標は、解散の時期をできる限り先送りすることであつた。彼が国王に行った説明は、とてつもなく憂うつに満ちていた。彼はこう書いている。

「11月21日は、会議の日に指定された日でした。したがって、我々は一堂に会しましたが、陛下、本当に、私はあの光景を見たときほど悲しい気持ちになったことはありませんでした。集まった者全体の中にガウンを着た者は一人もおらず、長剣を差している者が多数いましたが、それ以上に多かつたのは短剣を携えている者でした。これらの者のほとんどは、銃を家に置いて来ていました。自称聖職者会議議員の総数は、およそ260名です。その1人1人に2人の、人によっては3人の、また人によっては4人の補佐人がついていて、補佐人は投票することができず、ただ意見を述べたり、代議員の手助けをするために来ていました。しかし、その本当の理由は、大規模な混乱した群衆を作り上げることです。そして、私はこう付け加

72) 原注：Compare *Burnet*, 94 with *Baillie*, i. 124. (*HE8*, 368)

73) 原注：イングランドの下院議会の議長に相当する。(*HE8*, 369)

えましょう、もっとも無知な群衆を作るためだと。といいますのは、代議員の中には文字を書くことも読むこともできない者もいたからです74)。代議員の大部分は学問が完全に欠如しており、しかし、学問があるようなふりをしているごく少数の牧師や、これまでに存在した中でもっとも頑固で扇動的なピューリタンである牧師たちの意見に従うことを決意しています。ここからは、反乱とまではいわなくても、権威に対する完全なる不服従以外の何も期待できません。しかし、これは陛下がこの長い間、十分な理由をもって期待してきたものであるにすぎません。私は、枢密会議の中に彼らと一緒にやっぺいこうという強い傾向を見出さなければ、そのことをそれほどは気にしないでしよう。と申しますのも、陛下、信じて下さい。彼らほど主教による統治から抜け出したいと思っているピューリタンの牧師は、彼ら全体の中には一人もいないからです。そして、今回の会議がこのような事態に至ってしまったことは、その彼らの過ちなのです」と75)。

(聖職者会議におけるハミルトン)

たしかに、ハミルトンは自分が引き受けた役割をよく果たしたが、それでも聖職者の間に平信徒長老に対する反発を引き起こす試みには完全に失敗した。

(11月27日、聖職者会議、成立する)

11月27日、聖職者会議は正式に成立したことを宣言し、平信徒長老が会議に存在することに反対する、署名のほとんどなされていない請願書を、見るべき価値のないものとして却下した。

(ハミルトンの会議に関する説明)

ハミルトンは、決裂はもうあまり長く避けることができないということを知っていた。王に次のように書いている。「私はこの不運な国でずっと運に恵まれなかったもので、あらゆる俗的な事柄はあとにして陛下のために働いたものの(中略)すべてはほとんど効果を出しませんでした。というのも、イングランドからの手助けなしで、この反逆的な国民の侮辱行為を抑制できるような力強い党派を、このスコットランド

74) 原注：明らかに、聖職者会議の平信徒メンバーの一部に言及している。(HE8, 369)

75) 原注：Hamilton to the King, Nov. 22, *Hamilton Papers*, 59. (HE8, 369)

訳注：ドナルドスン, pp. 307-308.

にお作りすることができなかつたのですから。また、この悲惨な国が受けるに足る以上の負担を陛下にお作りしてしまったのですから」と。ハミルトンは、闘争が始まれば必ず自分が初めに被害にあうことを予期して、そして、そのことを嫌悪して、辺りかまわず当たり散らした。彼には、自分と国王を除くすべての者が責任者であるように見えた。

(主教に対する攻撃)

主教たちは‘法律では正当化できない’ことを行つたのだ。‘彼らのプライドは大きい。しかし、その愚かさはもっと大きい’。彼らの中には‘最良の生活を送っていない’者もいれば、‘聖職売買に染まっている’者もいると。

(戦争の遂行に関するハミルトンのアドバイス)

そして、彼はまだ試されていない計画に対するいかにも彼らしい自信を込めながら、国王にこう保証した。すなわち、勝利は容易に確保されるだろうと。港を封鎖することによって、王はスコットランドの通商を破壊できるだろうと。これまでのところ、ハミルトンはウェントワースと同じ考えであつた。しかし、彼はウェントワースが信じていないことを信じていた。すなわち、スコットランドにおいてチャールズのために戦う軍隊を集めることはまだ可能であると。彼はいう。ハントリーをスコットランド北部における国王の代官にお命じなさいと。そして、トラケアーもしくはロックスバラを南部における同様の地位にお命じなさいと。そして、この二人の上に国王の特別代理人を設けなさいと。(それは間違いなくハミルトン自身であつただろう。) エディンバラ城に武器や弾薬を搬入することは難しいだろう。しかし、アイルランドから兵を送ることによって、ダンバートン城を確保することは簡単だろう。ハミルトンは終わりにこう締めくくっている。「私は陛下にたった一つお願いがあります。もしも私の息子たちが生きるとしたら、彼らはイングランドで育てられますように。そして、宮廷にお仕えして幸福になりますように。もしも彼らが王室に忠実でなかったとしたら、私は彼らを呪うでしょう。また、私の娘たちが断じてスコットランドで結婚しないことを願います」と76)。

(11月28日、主教たちの裁判権辞退書が提出される)

76) 原注：Hamilton to the King, Nov. 27, *Hardwicke S. P.* ii. 113. (*HE8*, 371)

この手紙が書かれた翌日、すなわち 11 月 28 日に危機が到来した。この日、主教たちの裁判権辞退書が提出された。議長のヘンダーソンは、主教の反対の趣旨の主張にも関わらず、当該聖職者会議が彼らの訴えを裁く適切な判断者か否かを投票にかけることにした⁷⁷⁾。その答えが出る前に、ハミルトンが立ち上がった。彼は国王の提案、すなわち、「すべての不満は解消される」、「主教は将来の聖職者会議に対して責任をもつようにする」を読み上げた。しかし、彼は今日の前にある聖職者会議の合法性を認めることは拒絶した。ハミルトンが認めるつもりのある聖職者会議は、聖職者のみによって選ばれ、聖職者のみによって構成される会議であった。これに対してヘンダーソンは、長い演説の中で、たとえ宗教に関わる問題であっても国王に大きな権力を帰したものの、ハミルトンが掲げたこの会議の構成に関わる問題点に関しては、これに触れるのを避けた。いかなる会議も、自己が依って立つ基盤に関わる問題点については、これに関する攻撃に耳を傾けるのを嫌うものである。今回の聖職者会議は、おそらく自分たちが解決済みだと判断している問題、すなわち前回、平信徒長老が存在することに反対する請願書を却下することによって解決したと思っている問題に関しては、これを再燃させることを拒絶した。ハミルトンは、さらなる引き延ばしを求めたがだめだった。ヘンダーソンは、「私は、この会議が自らを適切な判断者と考えるか否かを問わなければならない」といった。そして、激しい討論が続いた。ラウダウンは、「もし主教が国民会議の判断を拒否するならば、私は神以外に適切な判断者を知らない」と述べた。一方、ハミルトンは国王の代理人として次のように述べた。「私は、民事的な訴え、宗教に関わる訴え、すべての訴えに対する最高の判断者としての国王大権を支持する。汝らは国王に訴えることはできると思うが、ここで訴えが議論されてはならないのである」と。

(ハミルトン、会議を解散する)

いかなる共通の理解ももはや不可能であった。もう二言、三言述べたあと、ハミルトンは当該聖職者会議を国王の名において解散することを宣言し、教会をあとにした。彼が立ち去るとすぐに聖職者会議は、「当該聖職者会議は、起こったことすべてにもかかわらずセッションを続ける権利を得た」と決した。そして、その最初の行為は、当該聖職者会議が主教について裁く適格性を備えているという決議を通すことであった。

77) 「主教の反対の趣旨の主張」とは、つまり、「当該聖職者会議は主教の訴えを裁く適切な判断者ではない」ということ。

(アーガイルの宣言)

ハミルトンが出ていったあと、聖職者会議が大いに励ましを受けたにちがいないと思われる出来事が起こった。アーガイルは、ハントリーと同じくほとんど国王に近い権力をもつ者であった。5,000人のハイランド兵を動員することができた。また、ハントリーと同じく、長らくローマ・カトリック教会を信奉してきた家柄の出身であった。最近亡くなったばかりの彼の父親(78)は、長年ネーデルラントにおけるスペイン軍に属していた。父が留守の間、彼は父の代わりにクラン(氏族)に対して権力を振るった。しかし、彼は父と同じようにローマ・カトリックに帰依するのは拒絶して、南部ローランド地方の人々の習慣と思想に自分を合わせた。彼の姿はエディンバラでよく見かけられるようになり、彼は枢密会議官の地位に就いた。かくして彼は、早いうちに、ハントリーのような地元の政治家になるのではなく全国レベルの政治家になった。彼は貴族として、彼の階級に共通して存在した主教に対する嫉妬心をもっていた。しかし、彼は抜け目がなく慎重だったので、いかなる主義主張も軽率に抱こうとはしなかった。また、枢密会議官としての彼の地位が、通常以上に彼を用心深くさせた。彼は権力志向の野心家であり、手段の選択にも良心の呵責はなかった。しかし、彼には当時のほかの貴族と異なって勇気がまるでなかった。敵が勢ぞろいしているのを見ると、すくみ上ってしまうのだ。そのような感情は彼の政治経歴にもはっきりと表れていた。彼には自分を多数のほうに置く確かな本能があり、また、その多数がおぼろげながら意識していることをはっきりと把握する素晴らしい能力もあった。動乱のときは、そのような能力こそまさに力であった。そして、そんな時は(そんな時があるとすれば)、目的について確信しており、ただ、その目的を実現する手段について不確かな群衆は、その精神的な力と志操堅固性に自分たちの信頼を置くことができる者の導きを探し求めるようになるのである。そのような者はまさにアーガイルであった。彼が今行おうとしている選択において、いかなる意識的偽善もなかったことは、おそらく十分すぎるほどその通りなのであろう。もしも彼が自分の周囲の人々と信念を共有していなかったら、実際ほど長きにわたって彼が権力を保持しているのはほとんど無理であっただろう。おそらく、彼は敵の軍隊に対抗できなかったのと同様、人民の信念に対抗することはできなかったのであろう。とにかく、彼が今自分の立場を宣言する時が来た。ハミルトンが枢密会議のメンバーを従えてさっさと教会か

78) 7代目アーガイル伯アーチボルト・キャンベル(1575/6-1638) 1621年に妻とともに大陸に渡り、そこでローマ・カトリックへの改宗を宣言し、フランドルにおけるスペイン軍に入った。その後とどまり続け、1627年にスコットランドに帰国した。(John Callow, *Campbell, Archibald, seventh earl of Argyll*, DNB)

ら出ていったあと、アーガイルだけがその場に残った。そして、彼は多対寡の対立の中で前者のほうについた。彼は、「私は事を荒立たせようとはせず、できる限り穏便に収めようと努力してきたが、今、私はこのことをあなた方に知らしめたいと思う。すなわち、私はあなた方すべてを合法的な聖職者会議のメンバーと見なす。そして、誠実なスコットランド人であると」といったのである。

(12月、聖職者会議におけるさらなる手続き)

セッションは12月20日まで続いた。当然の成り行きとして、祈禱書と教会法、パース条項が一扫された。会議は、主教に不利な単なる伝聞に過ぎない、信じられないような告発を、驚くほどの信じやすさで受け入れた。主教制は未来永劫廃止することが宣言され、主教制時代に開かれたすべての聖職者会議が無効であることが宣言された。そして、長老制に基づく統治が復活させられ、その教えがカルヴァン派正統派と合致しない聖職者が追放された79)。

(スコットランドの聖職者会議とイングランド議会との比較)

スコットランドの聖職者会議によってこのように発せられた異議申し立ては、1629年にイングランド議会によって発せられ、1640年に再び同議会によって発せられた異議申し立てと主要な点において同じであった。同聖職者会議は、国民によって認められた宗教は、あらゆる矛盾を超えたところに位置づけられるべきであり、国王もほかの誰もその宗教の儀式や信条にあえて修正を加えようとしてはならないことを要求した。スコットランドには、イングランドよりも早く反乱が起きるようにする多くの条件があった。チャールズがスコットランドの宗教に対して行った攻撃は、彼がイングランドで行った攻撃よりも広範囲に及び、より挑発的であったこと。また、スコットランドの国民はイングランドの国民よりも団結するのにより積極的であったこと。また、イングランドにおける政府は現実的な存在であったのに対し、スコットランドにおいては、政府は不在国王のシャドー（影）に過ぎなかったこと。また、人民自体の中にカルヴァン派聖職者の影響は、思想と人格の奇妙な統合を生み出していた。貴族でさえも、ほとんど同じ鋳型に入れられて作られたように見える。たしかにアーガイルやモントローズは、その際立った人格によって仲間うちで目立っていたが、あとの者はほとんど名前だけの存在だった。ウェントワース、ノーサンバランド、コッティ

79) 原注：Peterkin's *Records*, 128. *Baillie*, i. 165. Hamilton to the King, Dec. 1, *Hamilton Papers*, 62. (HE8, 373)

ングトン、ポートランド、エセックス、セイについて語る歴史からロシス、ラウダウン、バルメリーノ、リンジーについて語る歴史へと移ることは、『イーリアス』の多彩な世界から『アエネーイス』のギュアスやクロアントスに移るようなものである

80)。人格の独自性の欠如は、その分団結するのを容易にした。またそれは、運動の実際の指揮を聖職者に委ねることも容易にした。どのような勢力が背後にあったにせよ、起こされた革命は長老主義者の革命であった。説教師は、スコットランド国民の導き手であり英雄であったし、そうあり続けた。説教師が強かったのは、その論理よりももっと大きな、気高い、理想的な確信に訴えたからである。主教制が禁じられるべきものであるのは、個別の主教が間違っただけをしたからではなく、同じ真理を伝道する仕事に就く者は、平等でなければならないという建前においてである。国王の影響が教会から排除されなければならないのは、チャールズが不当に干渉的であるからではなく、教会は天における王しか知らないからである。このように考えることによって、スコットランド人民は気高く、純粋になったことは間違いないことである。もしも地上の国王に命じられるままにさらに大きな信条を受け入れていた場合よりもはるかに気高く、純粋になったのである。思想の自由については、スコットランドの説教師は何も知らなかったし、また、わざわざ知ろうとも思わなかった。信者の大部分にとって彼らは良き導き手であって、彼らの教えの中で、彼らの周りに存在する信仰心に報いていた。しかし、スコットランドは奇抜な思想や行動のための国ではなかった。そこには強靱さがあった。そして、祖国の土地と祖国の宗教に対する勇敢な擁護があった。しかし、精神と心の自由は、いつかイングランドから学ばなければいけなくなるだろう。

(戦争は不可避に)

チャールズはグラスゴーで自分の権威が否定されたあと、和平を願ったかも知れないが、戦う価値があると思っていたものすべてを犠牲にする覚悟でもない限りは、戦争を避けることはできなかった。彼にとって、父の言葉とされる「主教なければ国王なし」は、まさに本当のことであった。彼はスコットランドの主教を選ぶにあたって、周囲の宗教的感情に染まっている者からは選ばなかった。むしろ、チャールズが自己の宗教的実践を気の進まない民衆に課すにおいて、その道具となりえる人物を探し求めた。たしかに彼は、グラスゴーにおける聖職者会議が開かれる前に、もともとの係争点をすべて放棄した。すなわち、典礼 (liturgy)、教会法、パース条項、責任を伴わない主教制である。また、たしかにチャールズの、聖職者会議に対して責任

80) 要するに地味な世界ということか。

を負う穏健な主教制と、聖職者会議自体による直接的な教会統治との間には、違いはそれほど大きかったようには見えない。しかし、チャールズのような者にとっては、勝利の外観を装うことは勝利そのものよりもいっそう重要であった。彼は誉れ高く、慈悲深く譲歩することはできなかった。（エドワード1世やエリザベス女王だったらそうしたであろうが。）彼は、議論に対して譲る気のないものを力に対して譲ったということを認めれば、すべてが失われると感じていた。そこから生じる危険はスコットランドだけにとどまらないだろう。イングランドにおける彼の権威は、軍隊に依って立っているのではなく、「国王は聖俗両方のすべての問題に関して至高の存在である」という伝統的確信の上に成り立っていた。もしもスコットランドの聖職者会議が宗教問題におけるその至高性を求めるのであれば、イングランド議会が同じ主張を行う日もそう遠くないであろう。チャールズと臣民との問題は、もはや祈禱の形式や教会統治の問題ではなくなっていた。それは、まさに政治的秩序の土台に到達しつつある問題になっていた。

(7)チャールズと外国との関係

(チャールズと外国との関係)

チャールズが目配りするように強いられたのはイングランドとの関係だけではなく、大陸諸国との関係で自分の地位は、スコットランドで起きている騒乱のために著しく弱められていることを知っていた。そして、その騒乱はフランス政府によって助長されていると信じ込んでいた。

(ハンブルクにおける会議)

チャールズの外交はこの一年、エディンバラやグラスゴーにおけるのと同様、大陸においても成功していなかった。甥のチャールズ・ルイスのためにファルツ領を回復してやりたいという彼の願望は、それまでと同様、実現する可能性は少ないように見えた。ハンブルクにおいて大使たちどうしで会合を開くこと（そこに1637年にパリで交渉下にあった条約の条件について話し合うことが付託されていた⁸¹⁾）は大幅に遅れていた。そして、1638年の夏になって初めて、サー・トーマス・ローがハンブルクにおいてフランス、スウェーデン両国の全権代表と会うために派遣された。しかし、ローはすぐに自分には何もできないことを悟った。というのは、チャールズは、フランス、スウェーデン両国がファルツ領の完全回復なしでは和を結ばないことを約束することをなおも求めていたのに対し、これらの国々は、チャールズが海においてばかりでなく陸においても彼らに味方して参戦しない限り、その望みには応じられないという態度をなおもとっていたからである⁸²⁾。

(チャールズとフランスとの関係)

この結果にリシュリューは非常に満足であった。彼は、スコットランドとの紛争を抱えたチャールズが対仏連合には加われないことを知っていた。それ以上のことはもう長らく期待しなくなっていた⁸³⁾。

(チャールズ、甥を助けることを願う)

81) 原注：See page 217. (*HE8*, 375)

82) 原注：Roe's despatches, *S. P. Germany*. (*HE8*, 376)

83) 原注：Chavigny's despatches, *Bibl. Nat. Fr.* 15, 915. (*HE8*, 376)

一方、チャールズはそれほど明晰ではなかった。彼はスコットランドに対する兵を集める手段を模索してそれがうまくいっていなかったまさにその時に、すでにチャールズ・ルイスを野戦軍の司令官にする計画に没頭していた。彼は実際、甥に軍資金として3万ポンドを送った。甥はその金でメッペンの駐屯部隊の忠誠を買った。

(皇帝軍によってメッペンが取られる)

ところが、近隣の皇帝軍がメッペンを不意打ちした。そして、たいした抵抗も受けずに町を占領してしまった。

(ファルツ選帝侯の敗北)

夏になると若き選帝侯(チャールズ・ルイス)は、スウェーデン軍と合流するために小部隊を率いてオランダから出発した。しかし、スウェーデン軍は彼の支援を欲していなかった。彼を敵の面前に助けもなく置いて行ってしまった。チャールズ・ルイス自身はハンブルクに逃れたが、その弟ルーパートは、ロード・クレイヴンやその他の主要将校とともに捕らえられ、捕虜になってしまった⁸⁴⁾。

(メランダー軍を手に入れようとする)

しかし、チャールズはあきらめなかった。彼はしばらくの間、リシュリューとの交渉を保った。それは当時、最高の値をつけてくれる人に自己を身売りすることを待ち望んでいたメランダー将軍⁸⁵⁾の小規模の軍隊を、雇うための費用をリシュリューにも出させるためであった。しかし、リシュリューとしては自分でその軍隊を手に入れることを望んだ。そこでチャールズは、再び落胆するように運命づけられた⁸⁶⁾

(チャールズのスペインとの関係)

84) フロートーの戦い (1638年10月17日)

85) Peter Melander, Count of Holzappel (1589-1648) ドイツの将軍。三十年戦争におけるプロテスタント側の軍事的リーダー。1640年にカトリック側に転向。1647年からその死まで神聖ローマ帝国軍の総司令官にまで昇り詰める。(ref: Wiki, Eng, 'Peter Melander, Graf von Holzappel')

86) 原注: Despatches in *S. P. Holland and Germany*. Chavigny to Bellievre, Nov. 12, Dec. 14, *Bibl. Nat. Fr.* 15, 915, fol. 208, 230. (*HE8*, 376)

1638年のもっと早い時期に、すなわち、リシュリューからはあまり熱心な援助は期待できないということがわかると、チャールズはスペインのほうに目を向けた。彼は一商人の名前で、スペイン領ネーデルラント政府に火薬 3,000 バレルを売った。そして、それを自分の艦隊にダンケルクまで無事護送させた。

(ブリュッセルで秘密交渉)

そのあと、亡命中のロレーヌ公87)の妹であるファルスブル女公88)との長い秘密交渉が始まった。それはカーディナル・インファント89)の許可のもと、ブリュッセルにおいてジャービエイ90)によって行われた。スペインとの同盟計画も、ハンブルク会議が乗り上げたのとほぼ同じ暗礁に乗り上げた。スペイン側は、チャールズが直ちにフランスに宣戦布告することを求めた。チャールズ側は、神聖ローマ皇帝とスペイン人が、ファルツ領の少なくとも彼らが今実際に手中に収めている部分を直ちに甥に引き渡すように求めた91)。マドリッドの国务会議では、オリヴァレスが、「国

87) ロレーヌ公シャルル 4 世 (Charles IV, Duke of Lorraine) (1604-1675) 父はロレーヌ公フランソワ 2 世、母はザルム女伯クリスティーナ。1625 年に父よりロレーヌ公位を継ぐ。しかし、1633 年にフランスに攻められて公国の首都ナンシーを失う羽目に陥り、さらに翌 34 年にロレーヌ公領から追い出され、そののち神聖ローマ帝国の客将となる。(ref: Wiki, Eng, 'Charles IV, Duke of Lorraine', etc.)

88) Henriette de Lorraine, princess de Lixheim et de Phalsbourg (1605-1660) 上記ロレーヌ公シャルル 4 世と同父同母の妹。1621 年、アンセルヴィル男爵ルイ・ドゥ・ギーズと結婚。ドゥ・ギーズはシャルル 4 世より、「リクサイムおよびファルスブル公」に昇格させられる。1631 年にドゥ・ギーズが死に、妻のアンリエットが公国を相続する。しかし、1633 年にフランスから攻められ、スペイン領ネーデルラントに逃亡する。同地のネーデルラント総督の保護下に置かれる。(ref: Wiki, Fr, 'Henriette de Lorraine (1605-1660)'; Wiki, Jpn, 'アンリエット・ド・ロレーヌ')

89) カーディナル・インファンテ・オーストリアのフェルディナンド (1609/10-1641) スペイン王フェリペ 3 世と、神聖ローマ皇帝フェルディナンド 2 世の妹オーストリアのマルガリータの息子。1638 年当時のネーデルラント総督。(1633-1641) (ref: Wiki, Eng, 'Cardinal-Infante Ferdinand of Austria')

90) Sir Balthazar Gerbier (1592-1663/1667) 1634 年、チャールズ 1 世によってブリュッセルにおける彼の代理人に指名される。(ref: Jeremy Wood, *Gerbier, Sir Balthazar*, DNB)

91) 原注：この交渉に関するいくつかの通知が *Clarendon S. P.* の中にある。全体の説明は、ジャービエイ自身の急送公文書 *S. P. Franders* から得られるかも知れない。(HE8,

内のことで手一杯のチャールズが、どうしてフランスとオランダと面と向かい合うようなことについて話し合いができるのだ」と蔑んでいった。また彼はこうも付け加えた。すなわち、交渉全体が作りものに過ぎないことは疑いがないと92)。

(チャールズとカルデナス)

チャールズは1638年の夏と秋を通して、ずっとフランスとスペインに対して同時に同盟の申し込みを行っていたことを世間から隠すために、たくさんのことをしなければならなかった。駐ロンドン・スペイン外交官のカルデナスによって書かれた急送公文書が、スウェーデン側の手に落ちた。そこには、「神聖ローマ皇帝がイングランド国王と交渉を行っている。ファルツ領に関わるすべての問題がブリュッセルにおける会議で間もなく解決されるだろうとの期待をもって」という文言があった。チャールズにとって幸いだったことは、カルデナスはファルスブル女公が手がけていた本当の交渉については知らなかったということだった。そして、駐ウィーン・イングランド外交官のテイラーによって国王の許可なく提案され、それが国王の耳に入るなりすぐに否認された計画のことしか知らされていなかった。よって、チャールズは文字通りの真実を込めて（あくまでも文字通りの真実でしかなかったが）、世の中に向かって大声で抗議した。すなわち、「自分は大いに名誉を傷つけられた。テイラーが自

377)

92) 原注：Consulta of the Council of State, Dec. 14/24, *Simancas MSS.* 2527. (*HE8*, 377)

分の指示に反して行動した」と93)。カルデナスは、宮廷との行き来を全面的に停止され94)、テイラーは召喚され、ロンドン塔に投獄された95)。

(リシュリューの王妃に対する働きかけ)

フランスもスペインもチャールズから真剣な支援が来るとは思っていなかったが、彼の善意が役に立つかも知れない多くの間接的な方法があった。ゆえに、オリヴァレスとリシュリューの両方がチャールズの王妃と友好関係をもとうとした。1638年3

93) 原注：Consulta of the Council of State, Dec. 14/24, *Simancas MSS.* 2527. (12月14日付国務会議議事録) (*HE8*, 378)

94) 原注：1638年12月27日付ウィンドバンクよりホプトン宛書簡。1月11日付ウィンドバンクよりテイラー宛書簡。1639年4月4日テイラーの語り。(*Clarendon MSS.* 1161, 1170, 1218) ウィンドバンクはジャービエイに宛てた書簡の中で、後者がすぐにその話を否定しなかったことを責めている。そして、さらにこういつている。「あなたはサー・ヘンリー・ウォットンの『大使』の定義(訳注1)に背くのではないかという懸念をもつことなく、つつがなくそうすることができたであろうに。なぜならば、あなたは陛下と神聖ローマ皇帝との間には、何ら直接的な条約関係はないことを知っているのだから。そして、なされたことのすべては向こう側から来て、間接的にマネージされていた提案という形によってのみだったのだから。陛下は姿も見せてもいないし、何ら約束もしていないし義務も負っていないのだから。この趣旨に合うように、陛下はフランス大使に対して次のように答えられた。すなわち、『何らかの提案が向こうのほうから自分のところに来た』と。しかし、それが正式な、あるいは直接的な条約であることは絶対的に否定された。あるいは、その趣旨のいかなる書簡も自分と神聖ローマ皇帝の間では交わされていないと。そして、それが真実であるばかりでなく、陛下にはそれをする十分な理由があったのである。あなたの側から提案されたものの成功をより確信していない限りは。なぜならば、それが条約だと認めることによって、陛下はフランスとの条約を確実に失うのだから。ゆえに、陛下は両方を失う危険を冒すかも知れないのだ」と。(1639年1月4日付ウィンドバンクよりジャービエイ宛書簡, *S. P. Flanders.*)

訳注：

1. ヘンリー・ウォットンの『大使』の定義：「大使は、自分の国の利益のためにうそをつくために派遣された正直な紳士である」(ref: Wiki, Eng, 'Henry Wotton')

95) 原注：Windebank to Hopton, Sept. 29, 1639, *Clarendon S. P.* ii. 71. (*HE8*, 378)

月、リシュリューは彼女が長らく求めてやまなかった贈り物を彼女に与えた。すなわち、ドウ・ジャールス96)を捕らわれの身から解放したのである97)。

(4月、シュヴルーズ公爵夫人、イングランドに)

同年4月、より重いおもりが天秤の反対側の皿の上に載せられた。すなわち、陽気で機知に富み放縦なシュヴルーズ公爵夫人98)が、イングランド宮廷という十分に離れた安全な場所からリシュリューに対して画策するためにやって来たのである。

(ブリュッセルにおける王妃の生母)

彼女の到着は、より高い身分のもう一人の人物の来英の先触れであった。王妃の生母99)は長らくフランスからの亡命で疲れていた。自分を熱烈に支持する者たちによる蜂起という手段を使って自らの復権を果たそうとする望みは、もうだいぶ前に完全についえ去っており、スペインにとって役立つ存在であることをやめた今は、彼女はブリュッセルの宮廷で冷たくあしらわれていた。彼女にあてがわれた年金は不規則にしか払われず、彼女は昔のパリでの豪勢な生活を愚かしくも後悔しながら振り返っていた。パリでは廷臣や芸術家たちが、争って彼女に敬意を表しようとしていたものだった。

(彼女はフランスに戻りたがる)

彼女は、フランスに戻ることに許可を得ることはチャールズの権限外であることが信じられなかった。チャールズはマリー・ド・メディシスに懇願されて、この問題をフランス政府に託した。しかし、返答は芳しくないものであった。失敗の原因を彼女は、自分がスペイン領にいることに帰した。

96) 騎士。1633年2月、リシュリューによってバスティーユに投獄されていた。(Karen Ruth Britland, "Neoplatonic Identities : literary representation and the politics of Queen Henrietta Maria's court circle", submitted in accordance with the requirements of the degree PhD, The University of Leeds / School of English, August 2000, p. 150)

97) 原注 : Chavigny to Bellievre, Feb. 24/March 6, March 9/19, *Bibl. Nat. Fr.* 15, 915, fol. 93, 97. See page 98. (*HE8*, 378)

98) Marie de Rohan (1600-1679) シュヴルーズ公クロード・ロレーヌ (1578-1657) の妻。(ref: Wiki, Eng, 'Marie de Rohan')

99) マリー・ド・メディシスのこと。

(8月4日、オランダに入る)

彼女は8月の初め、湯治に出かけることを口実にしてブリュッセルを立った。そして、国境を越えてオランダ領に入った。彼女はそこでオレンジ公と全国議会から十分な敬意でもって迎えられた。彼女がいるということは、すぐにオランダ政府とフランス大使との間に誤解を生んだ。

(訪英を提案する)

その頃彼女の頭の中は、イングランドへ行く計画のことで一杯であった。(その計画はもうだいぶ前から抱かれていたのだろう。)

(8月13日、チャールズ、抗議する)

チャールズは常に、マリー・ド・メディシスが自分の領国内に上陸する許可を出すのを拒み続けてきた。彼は、彼女がいるだけでフランスと事を構えることになることを知っていたし、コニュー、ファブローニ、モンシゴーなど彼女がもっとも信頼を寄せている人物たちが陰謀にまみれており、リシュリューの最大の仇敵であることも知っていた。ゆえにチャールズは、すぐに彼のハーグにおける代理人であるボズウェルに指示を送り、彼女に抗議を行わせた。

(8月30日)

しかし、ボズウェルの抗議は冷淡に受け止められた。

(9月24日)

やっとボズウェルは、マリー・ド・メディシスが秘密裏に航海の準備を進めているということを知った。そこで、彼はファブローニに訴えた。しかしファブローニは、その話に真実はないと抗議した。

(9月25日)

翌日、マリー・ド・メディシスはイングランドに向けて出帆した100)。

(9月30日、モンシゴアのミッション)

9月30日、モンシゴアがチャールズに謁見し、自分の主人は今、イングランドへの途上にある、チャールズが彼女を追い払わない限り、彼女はまもなくイングランドに上陸すると伝えた。チャールズはマリー・ド・メディシスを追い返す勇気はなかった。もっとも、あの評判の悪い付き人たちがいなければ、彼女のことを喜んで迎えたであろうが。しかし、ヘンリエッタ・マリアの自分の母親に対するこのような侮辱に対する抗議が、チャールズに反対を取り下げさせた。そして、イングランド王妃の母親は、その高い身分にふさわしい敬意をすべて表されて迎えらるべきであるとの命令が下された。

(10月4日、マリー・ド・メディシス訪英に対するロードの意見)

しかし、娘を除いて誰も、マリー・ド・メディシスがイングランドに上陸するのを見たくはなかった。ロードは書いている。「私は彼女の来訪が国王に、スウェーデンを満足させる以上のものを費やさせないことを祈ります」と101)。しかし、対処法はなかった。ウィンドバンクはいつている。彼女の来訪は「あまりにも突然のことだったので、港を封鎖しない限りは避けようがなかった」と。

(10月19日)

マリーは、10月19日にハリッジ102)に上陸した。ロンドンに向かう途中で、彼女は熱烈な歓迎を受けた。国王はチェルムズフォード103)で彼女と会した。ロンドンに入ると、市長が彼女を温かく迎えた。通りに沿って上質の布がかけられた足場が組み立てられ、そこに市民が群がり、自分たちの町のゲストに敬意を表すか、あるいは、少なくとも自分たちの好奇心を満たそうとしていた。セント・ジェームス宮殿でマリーは王

100)原注：Coke to Boswell, Aug. 13 ; Boswell to Fabroni, Sept. 25 ; Boswell to Windebank, Aug. 9, Sept. 8, 26, 27, *S. P. Holland*. (HE8, 379)

101)原注：Laud to Roe, Oct. 4, *Works*, vii. 486. (HE8, 380)

102)ハリッジ (Harwich)：イングランド、エセックス州東部の北海に面した港、港町。
(Wiki, Eng, 'Harwich')

103)チェルムズフォード (Chelmsford)：エセックス州の州都。同州のほぼ中央に位置する。
(Wiki, Eng, 'Chelmsford')

妃に迎えられた。王妃とマリーは別れてから 13 年の歳月が経っていた。王妃は母親らしい誇りをもって、自分の子どもたちを彼らの祖母に紹介した。セント・ジェームス宮殿が、マリー・ド・メディシスが滞在する場所としてあてがわれた。

(彼女がフランスに戻るための新たな交渉)

チャールズはルイ 13 世に彼の母親がフランスに戻るのを許してくれるように頼んでみたが、不調に終わった。一方、マリー・ド・メディシスは、駐英フランス大使のベリエーヴル¹⁰⁴)にリシュリューに自分の弁護を行ってほしいと頼んだが、聞いてもらえなかった。アンリ 4 世の居丈高な未亡人¹⁰⁵)は、ただ無駄に恥をかいただけだった。

(12 月、交渉の決裂)

彼女は、もしもフィレンツェに行く気があるのなら、彼女の身分にふさわしい支度を整えてやろうといわれた。フランスでは彼女はいつも厄介者だったのであり、同国に入ることは許されなかった。しかし、そのような申し出は受け入れ難かった。彼女は、子ども時代の故郷に戻ってそこで見知らぬ人の中で生きていくよりは、イングランドに残って、チャールズの施しで生きていく、負担のかかる年金生活者になることを選んだのである¹⁰⁶)。

(上部ラインを巡る争い)

1638 年は、チャールズにとっていい終わり方をしなかった。彼の申し出はフランスとスペインの両方によって拒絶された。ハンブルク会議は、チャールズにとっては何の成果もなかったが、彼以外の者たちにとっては大ありだった。それは、フランスとスウェーデンとの間で神聖ローマ皇帝の世襲領に対する再攻撃に関する新しい取り決めがなされたことであった。ベルンハルト・フォン・ヴァイマー¹⁰⁷)がフランスから

104) Pomponne II de Bellièvre (1606-1657) 駐英大使。(1637-1640) (ref: Wiki, Fr, 'Pomponne II de Bellièvre')

105) アンリ 4 世の居丈高な未亡人：マリー・ド・メディシスのこと。

106) 原注：Bellièvre to Chavigny, Dec. 13/23, *Arch. des Aff. Étr.* xlvii. 305. *Memoir for Bellièvre*, Jan. 10/20, *Bibl. Nat. Fr.* 15, 915, fol. 258. (*HE8*, 381)

107) Bernhald von Sachsen-Weimar (1604-1639) (ref: Wiki, Eng, 'Bernhald of Saxe-Weimar', etc.)

補助金を受けて、上部ラインに位置するオーストリア領を攻撃した。そこはフランス軍の進軍をちょうど遮る位置にあった。1638年が終わる前に、フォン・ヴァイマーはラインフェルデンで大勝利を収め、さらにブライザッハの強力な要塞をも降伏に追い込んだ(108)。ブライザッハの降伏によって、リシュリユーは思いのままにフランス軍をドイツに入れられるようになった。また、それはスペイン領ネーデルラントに向けて陸路を經由して送られてくる補給物資を遮断できることをも意味した。リシュリユーは、彼の野望の目標はすでに手を伸ばせば届く距離にあることを感じた。二、三ヶ月前の王太子（のちのルイ 14 世）の誕生は、彼の権力の基盤をますます強めた。次のフランスの支配者は、彼の政敵ガストンでもなく、亡命中のマリー・ド・メディシスの同盟者でもなく、彼がこれまで仕えてきた君主の息子になるだろう。

（チャールズの不満）

ベルンハルト大勝利の知らせは、ハミルトンのグラスゴーにおけるしくじりの知らせとほとんど同じくらいホワイトホールでは悪い知らせだった。フランスは今や、ファルツがまさにそこから脅威を受け得るドイツの部分において強力だった。いや、それだけではなかった。陸からの脅威も大きかったが、海からの脅威も大きかった。フランス海軍は数の上でも質の上でも向上しつつあった。あるフランス艦隊がビスケー湾でスペインのガレー船団を焼き払った。また別のフランス艦隊がジェノヴァ湾でスペイン船団を撃退した。まもなく勝ち誇ったフランスの無敵艦隊が、イングランド水道をさかのぼってオランダ艦隊と合流して、ダンケルクを共同攻撃するという決意もありえない話ではなかった。だから、チャールズがリシュリユーの調子の良さを「どうして」と苦虫を噛み潰したように見つめていたとしても不思議ではない。また、彼がスコットランドにおける混乱にもリシュリユーの手が及んでいるのではないかと思ったとしても、やはり不思議ではない。チャールズの安寧を願う者は皆、スコットランドにおける混乱が収まるようにと願っていた。スコットランドに平和が戻ってくるまでは、イングランドは大陸のことについてはほとんど発言できなかった。トーマス・ローは書いている。「スコットランドからの知らせは、海外での我々の評判に致命的です。それがそんなにひどくならないことを望みます」と(109)。

108)ブライザッハの降伏：1638年12月17日（ウェッジウッド，p. 455）

109)原注：Roe to Coke, Dec. 14, *S. P. Germany*. (*HE8*, 382)

(8)チャールズ側の準備

(1639年、スコットランド紛争と大陸政治との関係)

ゆえに、1639年の年明けとともに、チャールズはスコットランドにおける問題だけでなく大陸における問題とも向き合わなければならなかった。チャールズはこの二つの問題が実際よりもはるかに密接に絡み合っているわけではないことを理解しようとしないうまい。スコットランド人の抵抗は彼にはあまりにもわかり難く見えたので、彼はスコットランド人の動きの裏にはリシュリューがいて、スコットランドで反乱が起きるように画策していて、イングランドが大陸に干渉できないようにしていると仮定しない限りは、スコットランド人の抵抗に説明をつけることができないと考えていた。ところがリシュリューは、何もその種のことはしていなかったのである。彼は、チャールズは自ら破滅の道を突き進みつつあると確信しており、すでに何の助けがなくても燃え上がりつつある反乱の火の手をわざわざ掻き立てるために干渉することは無意味だと考えていたのである。しかし、疑念だけでもチャールズの心配を増幅させるのに十分だった。もしも彼の支配を国内では不安定なものに、海外では見下げ果てたものにしたくなければ、何とかしてスコットランドにおける混乱を収めなければならなかった。

(1月15日、ハミルトンの報告)

ゆえに一步一步運命によって前へ押し出されながら（それは過去の過ちの結果に過ぎなかったが）、チャールズはゆっくりと、しかも不本意ながら戦争のほうへと向かっていった。1月15日、ハミルトンはイングランドの枢密会議の前で、彼の何の成果も出なかったミッションの報告を行った。そのあとに続いたディスカッションは長く心配に満ちたものだった。チャールズは交渉を続けたかった。彼もよく知っている通り、国中に不満が蔓延していた。戦費を集めようとするれば、「議会を開け」という声が跳ね返ってくるだろう¹¹⁰⁾。しかし、チャールズの頭の中でどのような和平プランが考えられるかはあまり重要でなかった。それどころかハミルトンが到着する前から、サー・ジェイコブ・アスリー（長らくネーデルラントで従軍していた）がイングランド北部に下向させられ、同地でトレインド・バンドを召集し、それにふさわしい

110) *Salvetti's News-Letter*, Jan. 18/28. Bellievre to De Noyers, Jan. 17/27, *Aff. Étr.* xlvii. fol. 341, 351. Joachimi to the States-General, Jan. 19/29, *Add. MSS.* 17, 677 Q, fol. 10. Giustinian to the Doge, Jan. 18/28, *L'en. Transcripts.* (HE8, 383)

訓練を施そうとしていた111)。たしかに「こうした予防措置の目的は、侵入された場合にそれに抵抗するためである」と公式にはいわれていたが112)、そのようなアナウンスメントが本気で信じられる可能性はほとんどなかった。

(1月17日)

1月17日、スコットランドに関する委員会は、国王にトレインド・バンドより3万人の兵を選抜するように勧告した。そして、国王が4月にヨークに赴き、交渉するか、あるいは、機会がもし味方をするならば戦うように、および、ニューカッスルとハルは防衛の状態に置かれるように手配された113)。また、武器と弾薬が大陸より大量に持ち込まれた。

(財政計画)

人と武器だけでは十分でなかった。「うまく金が見つかって、ピューリタンたちが黙っていれば、すべてはうまくいくだろう」と無関心な傍観者は書いている114)。ピューリタンが将来のある時期においてたとえ何をしようと、彼らは今のところ動く気配を見せていなかった。もちろん、海軍のために船舶税はまだ利用可能であった。それでも、ハムデン裁判の結果によって沸き起こった興奮が宮廷を警戒させたからなのか、あるいは、戦費がおもに陸での戦いにかかる可能性が高いことに鑑みて、海での戦いからかかる費用をできる限り抑えることが賢明であると考えられたからなのか、1638年秋の通常のある時期において船舶税令は出されなかった。

(船舶税)

たしかに1月が到来したときに船舶税令は出された。しかし、69,000ポンドが求められただけであった。しかもその3分の1は前年までに集められていた。これだけあれば、ペニングトンの指揮のもと、スコットランド沿岸に派遣されることが提案された18隻の軍艦の艀装ができるだろうと見積もられた115)。

111)原注：Astley to Windebank, Jan. 4, 11, *S. P. Dom.* cccix. 24, 65. (*HE8*, 383)

112)原注：The King to the Lords-Lieutenant, Jan. 11, *ibid.* cccix. 59. (*HE8*, 383)

113)原注：Minutes of the Committee, Jan. 17, *ibid.* cccix. 106, 107. (*HE8*, 383)

114)原注：Salvetti's *News-Letter*, Jan. 25/Feb. 4. (*HE8*, 383)

115)原注：Order in Council, Jan. 23, *S. P. Dom.* cccix. 194. (*HE8*, 384)

(1月26日、貴族が戦うように呼びかけられる)

しかし、軍隊の準備と給料の支払いのための財源を見つけることはそれほど簡単なことではなかった。その年の初め、当初ボーダー地方に配置することが意図されていた3万人の軍隊のために必要となる費用が見積もられた。その結果、そのような軍隊は年93万5000ポンドの割でやっと維持していけるように見えた¹¹⁶⁾。そのような莫大な額はチャールズの財力を超えていた。よってチャールズは、もっと小さな軍隊で我慢することにした。実は負担を多少なりとも軽減するのではないかと思われる方法が一つあった。実は、貴族たちはその封建的保有態様¹¹⁷⁾によって、国王が軍旗を掲げたときは、国王につき従って戦争に行かなければならない義務があった。たしかに、前回この義務の履行が求められてからすでに長い年月が経っていた。しかし、チャールズは従来、ナイト爵という古めかしい義務を強制することによって国庫を満たしてきたのであり、そのチャールズが個人による直接奉仕という古めかしい義務を強制することによって軍隊を満たそうとしていたことは十分に領けることである。それゆえにイングランドのすべての貴族は、ボーダー地方の防衛のために、その身分にふさわしいだけの従者を引き連れて、自ら出頭するように命じられた。こうすることによって国王陣営は、1ペニーも支払うことなく少なくとも1200騎の参集を受けつけることができる、ホワイトホール宮殿では嬉々として見積もられた¹¹⁸⁾。

(2月、7000人の召集命令が出される)

2月初め、国王旗のもとに結集するより大きな軍隊の中核を作るため、歩兵6000人、騎兵1000騎を召集するための命令が出された。これにヨークシャー、ダラム、ノーサンバランドのトレインド・バンド4000人が加えられることになった。こうし

116) 原注：*S. P. Dom.* ccccxv. 119. ハミルトン氏は、この資料に推測的に3月の日付をつけている。しかし、計画はその時までには放棄されていたのであり、1月末よりずっとあとに起草されたものとは考えにくい。(HE8, 384)

訳注：ed. by John Bruce and William Douglas Hamilton, *Calendar of State Papers, Domestic Series, of the Reign of Charles I. 1638-1639* (Her Majesty's Stationery Office ; London, 1871) Hathitrust と BHO で閲覧可能。

117) 封建的保有態様 (feudal tenure)：受封者がその領主のもとで不動産を保持している条件。(マッケクニ, p. 54)

118) 原注：The King to Lord Grey of Werk, Jan. 26. Northumberland to Conway, Jan. 29, *S. P. Dom.* ccccx. 24, 80. (HE8, 384)

てチャールズは、貴族から供給を受ける騎兵隊も含めれば、野戦用の軍隊 1 万 2000 人をもつことになった。一方、ベリックの守備隊として、リンジー伯がリンカンシャーより 2000 人を連れてくることになった。また、カンバーランド伯がカーライルで 800 人からなる部隊の指揮を執ることになり、そのうち 300 名はウェントワースがアイルランドで召集した兵から出されることとなった。また、東部諸州出身の 5000 から成る小さな軍隊が船に乗ってハミルトンについて行くことになった。これはアバディーンで上陸して、スコットランド北部でハントリー軍と合流するためであった。合計で国王軍は、2 万人近くになると見積もってよいだろう(119)。

(イングランドにおける感情)

このような兵力は、たとえチャールズが国民的支持を確実なものにしていたとしても、今手がけている仕事を行うにはおそらく不十分であったろう。しかし、その国民的支持は、その兆候がまったく見えていなかった。たしかに貴族たちは、彼からの召集に応じるか、あるいは、病気か老齢の場合には役務を提供する代わりに金を送ってきた。ウェントワースは、アイルランドで公務にとらわれていたので、国王がイングランド北部に現れ次第、国王に 2000 ポンドを支払うように執事に命じた。また、カトリックであるウィンチェスター侯は 500 ポンドを送った。しかし、ピューリタンであるロード・ブルックは、国王に随行するように求められたとき、自分は「議会によってしかそのような類いの支援に応ずる義務はないと心得ます」と答えた(120)。また、同様にピューリタンであるロード・セイも、やや似たような返事を返してきた。しかし、法律は明らかに彼らにとって不利であった。そこで彼らは考え直し、少なくともイングランド領内においては、陛下に随行する用意がある旨表明した。

(ホランド、騎兵司令官に。エセックス、全軍の副司令官に)

かくして構成された軍隊に指揮官を据えることが必要であった。総司令官にはアラデル伯がなることになった。彼は威厳のある貴族であったが、ウィーンでのミッションはうまくやれなかった。そして、心情的にはカトリックであり、長老派が支配す

119) 原注：詳細は軍財務官の報告書 (*Audit Office Declared Accounts*, Bundel 301, Roll 1148) の中に見出されるであろう。ハミルトンの兵士は、そこでは 4500 と書かれている。ハミルトン自身は、おそらく将校や砲兵、その他の人員も含めて 5000 と見積もっているであろう。(HE8, 385)

120)原注：Minutes by Nicholas, Feb., *S. P. Dom.* ccccxiii. 117. (HE8, 385)

るスコットランドを心から嫌っていた。また、新司令官は一度も戦争を目の当たりにしたことがなかった。当初、騎兵司令官にはエセックス伯がなる予定であった。彼はネーデルラントである程度の軍務の経験を積んでいた¹²¹⁾。しかし、王妃が自分のお気に入りであるホラント伯にその役職を振り当てることを求めてきたのである。ホラント伯はその役職にもっともふさわしくない者であった。そこでエセックス伯は、騎兵司令官よりは輝かしくない役職、すなわち、全軍の副司令官の役職に甘んじなければならなかった。かくして、まだ一連隊も編成されていないうちから嫉妬の種がばらまかれた。アランデルは、ホラントがそのような権威ある役職に収まるのを見るのであれば、自分の役職を放り投げるといった。彼が辞意を撤回させられたのは、チャールズによる熱心なとりなしがあったからである¹²²⁾。

(1638年、スペインの兵士が求められる)

たとえチャールズがもともと定められていた限界を超えて軍隊の数を増やそうとしても、そうした軍隊は訓練という点ではなほ遺憾な点を残すだろう。しかし、もし古参兵がいて、それが軍隊の中核となれば、未熟な召集兵も早期のうちに鍛錬を積んだ軍隊のまとまりというものを獲得するだろう。そのような古参兵は、フランドルにおいて見つけられた。早くも1638年の夏には、スペイン政府に向けてそのような兵士の貸与が申し出されていた。その時カルデナスは、その要求を拒否するように指示されていた。チャールズがまいた不信の種は治癒しがたいものだったので、オリヴァレスはイングランドがスコットランドで勝利することがイングランドとフランスの同盟につながるのではないかと恐れた。ちょうどリシュリューが、それがイングランドとスペインの同盟につながるのではないかと恐れたように¹²³⁾。

(1639年1月、ゲイジの提案)

計画はしばらくの間没にされていたが、二、三ヶ月後にまた復活してきた。1639年1月、スペイン軍に入隊しているカトリック教徒の士官であるゲイジ大佐という者が

121)原注：歴史家は彼がファルツで軍務について語るのが好きだが、そのようなものはなきに等しいものである。(HE8, 386)

122)原注：Northumberland to Wentworth, Jan. 29. 29, *Strafford Letters*, ii. 276. The King to Arundel, Feb. 9, *S. P. Dom.* ccccxii. 74. Con to Barberini, Feb. 1/11, *Add. MSS.* 15,392, fol. 39. (HE8, 386)

123)原注：Philip IV. to Cardenas, Sept. 3/13, 1638, *Simancas MSS.* 2575. (HE8, 386)

イングランド政府に、「もしも大量の新兵の募集を毎年自発的入隊という形でイングランドおよびアイルランドにおいて行うことを許されるならば、カーディナル・インファントがチャールズにそのスコットランドでの戦いのために古参兵部隊を提供するように促されるかも知れない」と考えを伝えてきたのである。

(2月、スペイン軍兵士、一兵も割く余裕はなし)

これに基づいて、その交渉を行うための特別の使者がブリュッセルに遣わされた。カーディナル・インファントはその使者を丁重に迎えたが、しかし、彼は今フランス軍に脅かされているので、味方の兵士から一兵も割く余裕はないとはっきりと述べた(124)。

こうしてチャールズは、彼がこれまでに考えた中でもっとも破滅的な措置がもし実現したときに生ずる結果を見なくてもすんだのである。もしもこのようなスペイン軍がイングランドに上陸していたら、北はチーヴィオット丘陵(125)から南はランズエンド(126)に至るまで、国中が即時反乱を起こしていたであろう。

124)原注：Col. Gage to G. Gage, Jan. 26/Feb. 5. Instructions to Col. Gage, Feb. 5. Col. Gage to Windebank, Feb. 16/26. G. Gage to Windebank, Feb. 23/March 5, *Clarendon S. P.* ii. 21. (HE8, 387)

125)チーヴィオット丘陵：ノーサンバランド州とボーダー地方の間、イングランド・スコットランド国境線上を連なる高地。(ref: Wiki, Eng, 'Cheviot Hills')

126)ランズエンド：イングランドのコーンウォール州西部、ペンウィズ半島のペンザンスの町の西南西約8マイル(13キロメートル)にある岬。(ref: Wiki, Eng, 'Land's End')

(9)スコットランド側の準備

(ドイツで実戦経験を積んだスコットランドの兵士たち)

訓練され戦争疲れした兵士の存在は（その価値が上述のごとくチャールズによって認識されていたが）、スコットランドでは不足していなかった。まさにスコットランドの貧しさが、自分たちのことについてまったく予見がもてないことを通して、自分たち自身を強くした。長年にわたり、貧しさに困窮した屈強な冒険家たちがスコットランドからドイツへと渡り、そこでグスタフ・アドルフとその副官たちによって強靱な軍人へと変えられていった。そして多くの者が、略奪品の分け前とともにプロテスタンティズムに対する情熱をもって帰国した。プロテスタンティズムは彼らにとって危急存亡の秋^{とき}に力を与えてくれる信仰であったばかりでなく、富につながるスローガンであった。スコットランドの人口は少なかったが、戦いの日が来たときは、スコットランドは、チャールズが戦場に送り出すことができるすべてであった未熟練の農民兵からなる緩い軍隊に対して、訓練を積んだ兵士が少なくとも相当割合を占める軍隊を送り出すことができるだろう。

(スコットランド軍の指揮)

このような状況によって自分たちに与えられた武器¹²⁷⁾を活用しようとしたことは、とくに盟約派のリーダーたちの功績というわけではない。しかし、誇り高くはつらつとした貴族がもっとも犯しやすい過ちを避けたことは、彼らの功績であった。彼らは非常に早いうちに、「いかなるロシスやラウダウンも、ホランドやエセックスたちが行っているように、自分たちに不相応な軍事職を巡って争わない」と決したのである。スコットランドのプロフェッショナル軍隊は、プロフェッショナルな指揮官をもつことになった。

(アレグザンダー・レズリー)

探し求めた結果見つかったのは、アレグザンダー・レズリー、ファイフシャーの地主の私生児であった。体が奇形で低身長だったが、彼はドイツでの戦いで手柄を立てていた。たとえ戦略家として有名ではなくても、新兵を訓練して一端^{いっぽし}の兵士に育てたり、拠点^{ポイント}を占拠して保持する技に長けていた。

127)つまり、古参兵の存在。

(1638年4月、スコットランドを訪問)

1638年春、レズリーがポメラニアでスウェーデン軍の指揮を執っていたとき、彼はスコットランドを訪問した。自分の妻と家族を連れてくるためであった。途中、ロンドンで国王に謁見する機会を得、その際トーマス・ローに、もしも自分の現在の主人が自分なしでもやっていけるのなら、自分としては当時ファルツ選帝侯のために集めることが提案されていた軍隊の指揮官になりたいと思っていると述べたのである(128)。しかし、レズリーは祖国スコットランドに広がっている興奮の渦の中に身を投じてみて、か弱きチャールズ・ルイスに仕えているよりはもっと多くのものを自分に約束してくれるポジションへの道を、ひょっとしたら1638年春の時点で見出していたかも知れない。彼自身が盟約派の大義とかその他いかなる大義に対しても非常に熱狂的であったということはおそらくなかったであろう。しかし、だからこそ彼は熱狂者が多くいる軍隊の指揮官に向いていたのである。彼がレズリー・ファミリーの長であるロシスと連絡を取り出したのは間違いのないであろう。盟約派軍の指揮官職へのオファーがこの時なされたものであろうとなかろうと、ロシスはこのように有用な親戚の存在を忘れなかったであろう。

(11月、スコットランドに戻る)

レズリーは大陸に戻った。しかし、その年の終わり前に、彼は小さな船に乗って、イングランド船の見張りの中をかいくぐり、再びスコットランドにいた。彼は、「ドイツに来るたくさんのスコットランド人に盟約に署名させた」とか、「故国のスコットランド軍のために大量の軍需物資を手に入れた」などと知らせることによって、故国の人々の心を喜ばせることができた(129)。時折、武器と弾薬が海を越えて運ばれてきた。これらの中にはチャールズの手の者によって妨げられたものもあった。しかし、大部分のものはつつがなく陸揚げされた。

128)原注：Roe to Elizabeth, March 22 ; Elizabeth to Roe, April 2, S. P. Germany Zonca to the Doge, April 6, *Ven. Transcripts. R. O.* これによって、大方の書き手によってこれまでスポルディングから写し出されてきた話、すなわち、「レズリーはスコットランドに定住するつもりで故国に帰ってきた」は終止符を打たれるのである。レズリーが字を書くことができなかったという逸話については、Massonの *Life of Milton*, ii. 55 を見よ。(HE8, 388)

訳注：David Masson (1822-1907), *Life of Milton* (3 vols)(1858-1880)

129)原注：Baillie, i. 111. (HE8, 389)

(1639年、指揮権を握る)

グラスゴーの集会が終わったあと、すぐにレズリーは将軍職を与えられた。あらゆるところで防衛の準備が活発に行われた。とあるスコットランド人は2月にこう書いている。「我々は説教に、祈りに、演習にととても忙しいです。もしも陛下とイングランドにおけるその臣民がスコットランドに来たら、以前よりもハードなもてなしを受けるでしょう。主教制を廃止しない限りはだめです」と130)。

130)原注：Craig to Stewart, Feb. 12, *S. P. Dom.* ccccxii. 103. (*HE8*, 389)

(10)スコットランド人の声明文と国王の大宣言

(2月14日、スコットランド人の声明文)

2月14日、盟約派は状況を危機にまで高めた。すなわち、彼らは国王からイングランド人民に訴えた(131)。彼らはいふ。自分たちは自分たちの主権者に忠実であり、南の同胞とずっと良い関係でありたいと願ってやまない。これまでに起きた災いのすべては、一部の「イングランドで最高権力を握る教会人」の過ちによるものである。その者たちが自分たちの教会に革新を導入して、ローマ・カトリック教会に抗うために奮闘する人々に罰金を課したり、国外追放したりしたのだ。そして遂には、スコットランド教会に干渉し、将来イングランドで同様のことを成し遂げるための先例にしようとしたのである(132)。イングランド国民はそのような大義を信じて戦うつもりなのか。すでに教皇主義者たち(その秘密の宗教的確信がよく知られているアランデルがはっきりと示されていた(133))が、スコットランドに対して準備されつつある軍隊の指揮官職に就いている。もしも戦争が起こるのなら、それは主教制を再確立するための戦争になるだろう。もしもイングランド議会が召集されれば、それはスコットランド国民が自分たちと平等で、国王に忠実な国民であることを認めるだろう(134)。

(チャールズの憤り)

チャールズは痛いところを突かれた。イングランド議会に対する訴えはとくに腹立たしかった。王がカトリックを優遇しすぎているという主張は、イングランドに幅広く広まるであろう。彼は長い間、「ロードは変装したローマ・カトリック教会の友人である」という考えと戦ってきた。そして、そのことに反駁するために、彼は最近ロードに、ロードが15年前にイエズス会のフィッシャー(135)と行った対談において、

131)つまり、訴える相手を変えた。

132)つまり、国王が主教を通して教会を支配する体制。聖職者から主導権を奪う試み。

133)アランデルは、表向きはイングランド教会に属していたが、心情的にはカトリックであった。そして、今般、イングランドの対スコットランド遠征軍の司令官に任命されていた。

134)原注：*Rushworth*, ii. 798. (*HE8*, 389)

135)ジョン・パーシー(またの名をフィッシャー)(1569-1641) イングランド人イエズス会士。1622年5月、ジェームス1世の命令でウィリアム・ロード(当時ウェールズのセント・デイヴィッド管区の主教)と神学討論を行った。(ref: Timothy Wadkins, *Percy [alias Fisher], John*, DNB ; *HE4*, 281)

イングランド教会の教義を擁護したという話を出版物の形にして出版するように命じたばかりであった。

(2月10日、ロードの『フィッシャーとの対談』の発刊)

本は2月10日に世に現れた。しかし、それはカトリックやピューリタンたちから嘲笑されただけだった(136)。ロードはもはやバランスのとれた考察を期待することができなかった。まさにそんな時、彼は彼の年来の敵ウィリアムズ主教(137)に向けられた愚かな星室裁判所の訴追によって、新たなる中傷にさらされた。

(2月14日、ウィリアムズ、再び星室裁判所で裁かれる(138))

オズバルディストン(139)という名の学校の教師によって書かれたとある手紙が、バックデンのウィリアムズの家で発見された。そこには名前は明らかにされていないが、ある人物が「小さなヤマアラシ」とか「まやかし者」などといった不遜な形で呼称されていた。それがロードを指していることは、合理的な疑いがかけられなかった。ウィリアムズは、これらの言葉はスパイサー氏という者を指していると示唆した。しかし、ウィリアムズはこれらの手紙を所持していたかどで国王に5,000ポンド、ロードに3,000ポンドの罰金刑に処せられた。一方、オズバルディストン(法廷に出廷していた)は、情勢がどのように動いていきそうか聞くや否や法廷を抜け出し、あらゆる追跡から逃れた。彼はあとに書き置きを残し、そこにはカンタベリーの外に逃げたと書いてあった(140)。

(2月27日、国王の布告)

136) 原注 : Laud's Diary, Feb. 10, *Works*, iii. 231. Con to Barberini, Feb. 22/March 4, *Add. MSS.* 15,932, fol. 52. (*HE8*, 390)

137) John Williams (1582-1650) 聖職者。ヨーク大主教。(1641-1646) (ref: Brian Quintrell, *Williams, John*, DNB)

138) ref: *HE8*, ch. 83, p. 251.

139) Lambert Osbaldeston (1594-1659) 教師。ガーディナーの原文では“Osbardiston”と綴られている。(ref: Thompson Cooper, revised by C. S. Knighton, *Osbaldeston, Lambert*, DNB)

140) 原注 : *Rushworth*, ii. 803. (*HE8*, 390)

チャールズはイングランドの臣民に罰金刑を課したり投獄したりすることができたが、スコットランド人にまでは手が及ばなかった。2月27日、彼はスコットランド人の声明文に返答するための布告を発した。そこで彼は、「スコットランドの宗教が攻撃された」というのは間違いであると事実上述べている。それは彼の手の中であって完全に安全であると。そして、スコットランド人は君主による統治の破壊を目論んでいる。彼らはこれまでイングランド臣民に対して干渉してきて、今、イングランドに侵入する準備を進めている。それは彼らのリーダーがイングランドを略奪することによって、自分たちが失った財産を取り戻すためである(141)。もし今自分が軍隊を召集することを余儀なくされるとしたら、それは単にスコットランドにおける自分の権益を正当化するためではなく、まさにイングランドの安全保障がかかっているからであると。そして、彼は次のようにいう。「問題は、祈禱書が受け入れられるか否かではない。主教制による統治がこのまま続けられるか、あるいは、長老制が容認されるかでもない。私が彼らの国王であるか否かである」と。この布告文はイングランドのすべての教区で読まれるように指示された(142)。

(大宣言)

そのあとすぐに、いわゆる『大宣言』(143)が出された。それはスコットランド人の悪行全体がチャールズの視点から詳細に語られている分厚い本である。その著者はバルカンコール博士(144)というスコットランド人で、かつてハミルトンの専属牧師として、彼に伴ってグラスゴーに行ったことがあった。彼は今これを書いた報酬として、ダラムの首席司祭職を与えられた。

141)原注：チャールズはエリオットについてもだいたい同じことをいっている。彼（エリオット）は「心と財産に飢えた無法者」だと。(HE8, 391)

142)原注：Rushworth, ii. 830. (HE8, 391)

143) *A Large Declaration concerning the late tumults in Scotland, from their first originals : together with a particular deduction of the seditious practices of the prime Leaders of the Covenanters : collected out of their owne foule Acts and Writings : by which it doth plainly appeare, that Religion was onely pretended by those Leaders, but nothing less intended by them.* By the King. (London, printed by Robert Young, his Majesties Printer for Scotland, 1639)

144)Walter Balcanquhall (c.1586-1645) 国王の名のもとで『大宣言 (A Large Declaration)』を著し、1639年に出版された。(ref: John Coffey, *Balcanquhall, Walter*, DNB)

(戦いの性格)

少なくとも一つの点ではチャールズは間違いなく正しかった。迫りつつある戦争は、至高性を巡る争いになるだろう。これまで一般に理解されてきたところの君主制は、今、教會的形式をまとった国民主権原理の挑戦を受けているのである¹⁴⁵⁾。このような問題は、とてもスコットランドだけで戦って解決できる問題ではないだろう。スコットランド人の声明文が宣言しているように、イングランドの未来は今北で始まりつつある戦いの中に含まれていたのである¹⁴⁶⁾。

145)長老制は小会、中会、大会と代表が上に絞り上げられていくが、それはあたかも間接的に選ばれた国会の成立過程であった。大会に集う聖職者は、いわば国民の代表であった。

146)原注：*Melbourne MSS*の中に一通の手紙がある。それは2月20日付で、アーガイルより、見たところロードに宛てられたものである。その中でその手紙の著者は、両者の間の違いを最小化しようと試みている。すなわち、その著者はいう。「私は陛下がお認めにならないことはどんなことでも弁解しようと思わないのですが、それでも大主教のご厚意に甘えて次のように信じております。すなわち、大主教が言及された長老会（それを我々は「我々の教会」とか「聖職者総会」と呼んでいます）の苦情は、改革派教会（訳注1）とローマ・カトリック教会のまさに本質的な違いに関わるものであり、主教がスコットランド教会とスコットランド王国の法律と合法的な統治構造に背く限りにおいて、ただひたすら主教に向けられたものであるという点をわかって頂けると信じています。なぜならば、宗教における根本的な点があるか否かはここでは問われていないし、決定もされていないからです。（訳注2）また、根本的なことに限って言えば、誰もがそれを、それが他の人々にとって充足的なルールになるように定義しようとするとは思いません」と。さらにアーガイルは、スコットランド人は不服従であることを責められていると不満を述べている。「本当は、私たちは、私たちに明るい服従を求める人との関連で、宗教的義務の履行において、自発的な、かつ抑制された行動をとっているだけなのです。そのことをいかなるキリスト教徒も否定しないと思います」と。

最後の段落でアーガイルは、（現代の視点から見ると）問題の根本にまで斬り込んでいる。すなわち、彼はロードの干渉に一撃を加えて終わっている。「ですから、私は大主教とその他改革派教会（その統治構造はいざ知らず）のすべての人々が、スコットランド教会に対してできるだけ慈悲深く振る舞い、その平和を乱さないことを願います。かつて、この地で手続きを進めることによって、その過ちを注意深く予防してきたように（訳注3）」と。（*HE8*, 391）

訳注

1. 改革派教会（原文“the Reformed Church”）：ここでいう「改革派教会」は、イングランド教会のことであろう。
2. ここでいう「根本的な点」とは、その宗派で本質的に重要な教義、考え方という

意味であろう。ちょうど、祭服論争 (vestiarian controversy) における“indifferent”と裏腹の議論である。(ref: *HEI*, ch. 1, pp. 18-19) つまり、アーガイルは、スコットランド人は何も根本原則を変えるようなことは要求していないといっているのだと思われる。

3. つまり、問題の根本は、チャールズ 1 世下でチャールズ 1 世自身とイングランド教会の幹部やスコットランド教会の主教たちが、スコットランド人の宗教を扱うにおいてあまりにも配慮と繊細さを欠いていたということか。